



東京都青少年赤十字 100周年記念誌

あゆみ



ご挨拶	1
日本赤十字社東京都支部 支部長	1
東京都青少年赤十字指導者協議会 会長	2
東京都青少年赤十字賛助奉仕団 委員長	3
北京市紅十字会 常務副会長	4
大韓赤十字社ソウル特別市支社 会長	5
青少年赤十字のあゆみ(年表)	6
東京都の青少年赤十字のあゆみ	14
「草創期」(1922年~1945年)	14
「復興・発展期」(1946年~1988年)	16
「見直し・工夫期」(1989年~2022年)	21
東京都青少年赤十字賛助奉仕団	26
スペシャルページ Part.1「私にとってJRCとは」	30
インタビュー特集『私とJRC』	32
東京都青少年赤十字賛助奉仕団 小川 忠彦先生	32
一橋大学 准教授 竹村 仁美先生	36
下北沢成徳高等学校 JRC部	40
スペシャルページ Part.2「私にとってJRCとは」	44
東京都支部のJRC活動~今昔	46
スペシャルページ Part.3「私にとってJRCとは」	58
次の100年に向けて	60
資料編	62
おわりに	68



100周年記念誌『あゆみ』 発刊にむけて

日本赤十字社東京都支部
支部長 小池 百合子

東京都青少年赤十字は、その前身となる少年赤十字団が、麻布区麻布小学校、牛込区余丁町小学校、八王子市八王子第一小学校、北多摩郡村山小学校及び南葛飾郡小松川小学校において、1923年(大正12年)2月に結成されてから、間もなく100周年となります。こうして100周年を迎えることができますのは、ひとえに青少年赤十字加盟校の先生方をはじめ、青少年赤十字の趣旨に賛同をいただいた関係者の皆様の長年にわたるご支援のおかげでありますことを、心から感謝申し上げます。

日本赤十字社東京都支部は2022年(令和4年)5月から2023年(令和5年)2月を東京都青少年赤十字100周年アニバーサリー期間とし、記念事業を行うこととしており、その一環として東京都青少年赤十字100周年記念誌『あゆみ』を発刊することといたしました。

今から約100年前、結成間もない東京の少年赤十字団は、1923年(大正12年)9月に発生した関東大震災において、初めての組織的な活動として被災者救援にあたり、目覚ましい活躍ぶりをみせました。災害発生時に自分達と地域住民の命を守る「自助」、「共助」の精神は、現在の青少年赤十字にも受け継がれています。

また、青少年赤十字は「気づき、考え、実行する」という態度目標を掲げています。このたびのコロナ禍においても自分達は何をすべきなのか、「気づき、考え、実行する」ことに取り組んできました。外出できない福祉施設の高齢者の方々に喜んでいただけるようにと、伝統芸能を披露する生徒の動画にメッセージを添えて送付したり、学校周辺の地域で感染対策を講じたうえで清掃活動を行ったりするなど、創意工夫を凝らした様々なボランティア活動を展開しています。

さらに、青少年赤十字は、学校の教員と協力して防災教育教材『まもるいのち ひろめるぼうさい』を製作しました。この教材を利用しながら避難訓練を実施したり、災害用簡易トイレを作製したりすることなどを通じて、自分と周りの人々の命を守る学習をしています。青少年赤十字加盟校の中には、レスキュー部や防災部が設立された学校もあり、生徒が地域住民とともに防災のための活動を行っています。

今後とも、人の命が大切にされる社会を実現するため、青少年赤十字の活動にご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げまして、発刊のあいさつとさせていただきます。



100周年記念誌『あゆみ』 発刊にあたって

東京都青少年赤十字指導者協議会

会長 藤井 大輔

東京都青少年赤十字が100周年を迎えるにあたり、記念誌『あゆみ』が発刊されますことを皆様とともに喜びたいと存じます。

青少年赤十字は、子供たちが赤十字の基本理念である人道的価値観を身に付けて、自立した個人として成長することを目指しています。「人道」は難しい概念ではなく、「人の命を大切にする」という価値観です。人道は、誰の心の中にでもある「やさしさ」や「思いやり」の心であり、それを引き出し、育てることが青少年赤十字の役割です。

青少年赤十字では、人道的価値観を身に付けるため、3つの実践目標を定めています。まず「健康・安全」、次に「奉仕」、そして「国際理解・親善」です。また、児童・生徒が自主的で自立した生活態度を養うために「気づき、考え、実行する」という態度目標を掲げています。

東京都は、令和3年3月に新たな「東京都教育施策大綱」を策定しました。そこでは、未来の東京に生きる子供の姿を「自らの個性や能力を伸ばし、様々な困難を乗り越え、人生を切り拓いていくことができる」、「他者への共感や思いやりを持つとともに、自己を確立し、多様な人々が共に生きる社会の実現に寄与する」と描いています。

青少年赤十字が掲げる目標と東京都教育施策大綱が目指す子供の姿は、共通する点が多く、青少年赤十字の活動を推進することが即ち東京都が目指す子供の育成につながるものであると確信しております。

記念誌『あゆみ』が青少年赤十字の100年の歴史を理解する一助となるとともに次の100年に向け、青少年赤十字の活動がますます活発になり、発展することを心から願っております。



青少年赤十字 100周年おめでとう

東京都青少年赤十字賛助奉仕団

委員長 阿部 英幸

よくぞ「100周年」と思わずにはられません。青少年赤十字は、困っている人を少しでも助けること、役立つことを目的に、多くの青少年が集まり活動する団体です。普通は、このような理想を掲げて活動する団体を結成することさえ難しく、それが日本で100年も継続できたことは、奇跡にも近いことで、他では見られない大きな成果だと思っています。

青少年赤十字の誕生は、第一次世界大戦のさなかアメリカ、カナダ、オーストラリア、イタリアの国々の子どもたちが戦地の兵士や戦場となったヨーロッパの子どもたちに慰問の品々や手紙を赤十字社を通じて送ったことに端を発していることは有名です。

そして、その終戦間もない1922年(大正11年)3月に赤十字社連盟第2回のジュネーブでの総会で、青少年赤十字について話し合われ正式に発足しました。日本でも、同年5月に滋賀県野洲郡守山尋常高等小学校が、初の少年赤十字団を結成しています。東京では翌年(1923年)に、麻布小、牛込余丁町小、小松川小、村山小、八王子第一小の5校が少年赤十字団を結成しました。当時の学校制度は、現在とは大分違うので、どのような形で教師が指導し、子どもたちが活動したのか興味津津なのは、私だけではないでしょう。

長い歴史の中では、なかなか思うように加盟校が増えず、加盟校増強を呼びかけなくてはならない時代もありました。約50年前、そのような時代に私は教員生活のスタートをきったように思います。同時に青少年赤十字を知り、子どもたちに指導し始めました。当時、自主性を尊重する考え方に、心が洗われる思いでした。青少年赤十字の指導には教育の本質があると考えたのです。「気づき、考え、実行する」の目標は、子どもたちだけでなく手を取り合い助け合って生きる、すべての人びとの目標でなくてはなりません。

私たち青少年赤十字賛助奉仕団員の多くは、学校の教員時代に子どもたちを指導し、退職後、青少年赤十字に賛同する仲間を増やそうと、学校訪問やいろいろな機会をとらえて、努力をしています。

停滞は、衰退につながると考え、青少年赤十字がこれからもますます発展していくように、団員一致団結して、加盟推進に努力していきたいと思っています。

本当に、青少年赤十字100周年おめでとうございます。



三首都支部が手を取り合い 人道的課題に取り組む

北京市紅十字会
常務副会長 **李 宝峰**

東京都青少年赤十字創設100周年おめでとうございます。

北京市紅十字会を代表して、東京都青少年赤十字創設100周年に心よりお祝いを申し上げます。

創設直後の少年赤十字団は、関東大震災に直面しました。「自助」と「共助」の精神に基づき、若き団員は初めての組織的な救援活動を行い、目覚ましい成果を上げました。災害を通じて鍛えられた勇気と経験は、青少年赤十字の老いも若きもすべての人々の尊い命を守るという活動に現在も引き継がれています。

それから100年後の今日、私たち人類は新たな災害、COVID-19パンデミックの脅威に直面しました。そのような状況下でも高校生が外出できないお年寄りのために伝統的な日本舞踊を披露した動画を制作したり、感染防止対策を講じて学校周辺や地域の清掃活動を実施したりするなど、青少年赤十字メンバーが奮闘しながら粘り強く様々なボランティア活動を実施していることを見聞きしております。

若者とは昇る太陽です。若さは人生の春であり、勇気の源です。東京都青少年赤十字は100年にわたり、風雨に勇敢に立ち向かい、「気づき、考え、実行する」という態度目標を掲げて、精力的かつ堅実に歩み続けてきました。

しかしながら、未来は長い道のりです。道中には、花もありますが、同時に棘もあります。東京、ソウル、北京の青少年赤十字メンバーは、過去20年間そうしてきたように、手を取り合ってさまざまな人道的課題に取り組む必要があります。人道のたいまつが次の世代にも受け継がれ、古代より続くこの東アジアの地で赤十字精神が永遠に若いままであり続けることを願っています。

Congratulations On the 100th Anniversary of Tokyo Junior Red Cross

On behalf of Red Cross Society of China Beijing Branch, I would like to extend my sincerest and warmest congratulations on the 100th anniversary of Tokyo Junior Red Cross.

Shortly after their establishment, the JRC corps were confronted with the shock of the Great Kanto Earthquake. Inspired with the spirit of "self-help" and "mutual-help", young members carried out their first organizational relief activities and made remarkable achievements. The courage and experience forged in the disaster is still guiding JRC corps to guard the precious lives of both young and old.

Today, one hundred years later, our mankind is facing threats from a new disaster, the COVID-19 pandemic. Once again, we witness the effort and persistence of JRC volunteers in various activities: in the traditional Japanese dancing videos sent by high school students to the elderly people who cannot go out, and also in the cleaning

activities to prevent infection, both around the schools and in the communities.

Youth is the rising sun. Youth is the spring of life. Youth is the origin of courage. Braving the wind and rain, the Tokyo JRC, for one hundred years, has been taking vigorous and solid steps, towards its attitude goals of "Be aware of, think, and practice it!"

However, future is a long way to cover, where there are flowers, as well as thorns, in store. JRC/RCY members in Tokyo, Seoul and Beijing should join hands and meet various humanitarian challenges together, as what they did in the past twenty years. May the torch of Humanitarianism pass on to the next generation. May the Red Cross spirit remain young in the ancient land of East Asia forever.

李宝峰

Executive Vice President
Red Cross Society of China Beijing Branch
Li Baofeng



お互いの若者たちが 創造的な未来へ共に成長を

大韓赤十字社ソウル特別市支社
会長 **キム ファンクォン**

1923年2月に創設され、このたび100周年を迎えた東京都青少年赤十字に心よりお祝い申し上げます。三首都支部青少年赤十字交流プログラムのご縁でお祝い申し上げることができることを光栄に思います。

東京都青少年赤十字は1923年に東京の5つの小学校で創設され、関東大震災において、初めて組織的な救援活動を実施し、活躍しました。これ以来、青少年赤十字は、災害発生時に自分の命を守る（自助）だけでなく、人の命を守る（共助）という精神を受け継ぎ、今日まで人道を実践してきました。

「気づき、考え、実行する」という態度目標を掲げ、青少年赤十字はコロナ禍においても感染予防対策を施してボランティア活動を継続し、お年寄りのために自分たちのダンスパフォーマンス動画を制作するなど、非対面での文化活動を実施しています。このような青少年赤十字の教えに基づく社会貢献活動は、社会の構成員の模範になるものであり、青少年赤十字は、日本だけでなく世界中の人道支援活動にプラスの影響を与えるものであると確信しています。

過去20年間、ソウル特別市支社と東京都支部は、三首都支部青少年赤十字交流プログラムを通じてお互いの文化を理解し、人道思想の普及と世界平和に向けた赤十字運動とともに一緒に歩んでまいりました。コロナ禍というかつてない状況や急激に変化する社会においても、お互いの若者たちが赤十字の基本精神を共有し、創造的かつ革新的な方向に向かって共に成長することを願っています。

青少年赤十字は、過去100年と同様にその誇り高い歴史をこれからも続けて行くと確信しています。改めまして、青少年赤十字創設100周年をお祝いするメッセージとともに青少年赤十字の終わることのない発展を祈念いたします。

Congratulatory Speech by the Chairman of Korean Red Cross Seoul Chapter

I sincerely congratulate Junior Red Cross, which was established in February 1923, on its 100th anniversary. I think it is an honour to deliver congratulations on the 100th anniversary of JRC as SEBETO RCY/JRC exchange program became a connection.

Starting with five elementary schools in Tokyo in 1923, JRC played a great role in systematic restoration activities for the first time during the Great Japanese Earthquake (Great Kanto Earthquake). With this opportunity, Junior Red Cross has inherited the spirit of protecting not only one's own life ("self-help") but also everyone's life ("mutual-help") in disasters, and has practised humanity to this day.

With the goal of "Beware of, think, and practice it!" JRC is volunteering to prevent infectious diseases and provide non-face-to-face cultural activities and performance videos for the elderly despite the COVID-19 situation. I am confident that these

active activities for society with the spirit of JRC are a model for members of society, and that JRC will have a positive impact on humanity's efforts not only in Japan but also around the world.

For the past 20 years, Seoul Chapter and Tokyo Chapter have understood each other's culture through the SEBETO RCY/JRC exchange program and walked together with the Red Cross movement for humanitarian propagation and world peace. Even in the unprecedented situation of COVID-19 and a rapidly changing society, I hope our youth will exchange the basic spirit of the Red Cross and develop together in a creative and innovative direction.

I believe JRC will continue its proud history as much as the past 100 years. Once again, I wish JRC endless growth with a congratulatory message on the 100th anniversary of JRC.

Korean Red Cross Seoul Chapter
Chairman Kim, Heung Kwon

1877

明治10年

日本赤十字社の前身となる「博愛社」を設立

1886

明治19年

日本政府がジュネーブ条約に加入

1887

明治20年

博愛社を「日本赤十字社」に改称
東京府委員部設置

1897

明治30年

東京府委員部を東京支部に改称

1919

大正8年

赤十字社連盟創設、日本赤十字社加盟



博愛社設立許可の絵

1920

大正9年

第1回赤十字社連盟総会

1922

大正11年

第2回赤十字社連盟総会にて
少年赤十字の組織化を可決

少年赤十字設置要項を制定(本社)

滋賀県守山小学校に国内最初の
少年赤十字発足

1923

大正12年

東京府内に5少年赤十字団結団
(麻布、牛込余丁町、小松川、村山、八王子第一)



「少年赤十字団発祥の地」顕彰碑

1926

大正15年、
昭和元年

雑誌「少年赤十字」第一号発行
(本社)

第2回東洋赤十字会議、東京にて開催
(東京支部少年赤十字団員6,000名参加)

各国代表歓迎会開催(上野公園での
歓迎会には東京支部管下の団員1万名参加)

本社創立50周年

1934

昭和9年

第15回赤十字国際会議(本社にて開催)の決議により、小学校に
限られていた少年赤十字の範囲が中学校・高等学校・青年学校に拡張
少年赤十字を青少年赤十字と改称



雑誌「少年赤十字」第一号

1946

昭和21年

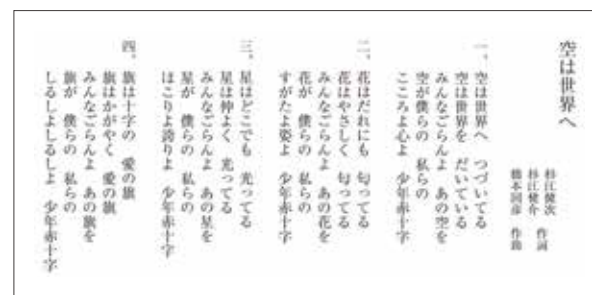
「青少年赤十字団報第1号(作成:東京支部)」発行
青少年赤十字講演会(本社主催)東京から小中学校教員228名参加

1947

昭和22年

アメリカ赤十字社よりオードレイ・H・バセット女史来日
少年赤十字の歌「空は世界へ」発表
赤坂中学校に青少年赤十字(再建第1号)発足
日米青少年赤十字交歓会(本社にて開催)(約500名参加、アメリカンスクール代表4名参加)

新たな青少年赤十字マークの使用を開始



少年赤十字の歌「空は世界へ」

1948

昭和23年

全国的に再建青少年赤十字の登録受付が開始
本社より「青少年赤十字の手びき」が各支部に配布
本社主催の第1回トレーニング・センター開催(神奈川箱根、岡山県玉野)
5月8日を「世界赤十字デー」に制定
新宿赤十字産院開設
国際学校通信「交換アルバム」実施

1949

昭和24年

青少年赤十字東京支部協議会発足(団員協議会または連絡協議会とも呼ばれる)
小中高中堅団員のトレーニング・センター(現在のリーダーシップ・トレーニング・センター)都下御嶽山にて実施
青少年赤十字東京支部大会、共立講堂にて開催(3,000名参加)
武蔵野赤十字病院開設



青少年赤十字の手びき

1950

昭和25年

第1回青少年赤十字大会、本社講堂にて開催
天皇皇后両陛下 赤坂中学校に行幸啓
赤十字子供の家開設

1951

昭和26年

東京支部青少年赤十字運営委員会発足
全国補導者協議会結成
天皇皇后両陛下 津久戸小学校に行幸啓
武蔵野赤十字保育園開設

1952

昭和27年

上野動物園迷子ボランティアの開始(東京学生奉仕団による)
青少年赤十字誕生30周年記念全国大会開催(本社)
血液銀行開設
日本赤十字社法 制定



御嶽山でのトレセン

1877

明治10年

西南戦争始まる

1904

明治37年

日露戦争勃発

1914

大正3年

第一次世界大戦勃発

1918

大正7年

第一次世界大戦終結

1923

大正12年

関東大震災

1928

昭和3年

帝国議会衆議院議員総選挙
男子普通選挙が行われる

1929

昭和4年

ニューヨーク株式大暴落で世界大恐慌

1939

昭和14年

第二次世界大戦始まる

1941

昭和16年

太平洋戦争開戦

1945

昭和20年

日本がポツダム宣言受諾、第二次世界大戦終結

1947

昭和22年

災害救助法制定
教育基本法、学校教育法 公布

1948

昭和23年

極東国際軍事裁判判決
国連総会で世界人権宣言採択

1949

昭和24年

中華人民共和国成立
湯川秀樹博士が日本人初のノーベル賞(物理学賞)受賞

1950

昭和25年

朝鮮戦争勃発
金閣寺全焼

1951

昭和26年

サンフランシスコで対日講和条約・日米安全保障条約調印

1952

昭和27年

血のメーデー事件

1953

昭和28年

新潟県内野市大火罹災校に青少年赤十字が義援金贈呈
新社法により東京支部を東京都支部に改称(2月13日)
葛飾赤十字産院、大森赤十字病院開設
東京都青少年赤十字運営委員会から東京都青少年赤十字研究協議会に改称

1954

昭和29年

「青少年赤十字の歌」発表

1955

昭和30年

オーストラリア赤十字社主催国際トレーニング・センターに初めて高校生メンバーを派遣(1名)

1957

昭和32年

青少年赤十字第1回スタディ・センター開催(本社)

1959

昭和34年

1円玉募金スタート
赤十字思想誕生100周年大会、本社にて開催

1963

昭和38年

赤十字創立100周年記念大会(ジュネーブ)

1964

昭和39年

日本青少年赤十字賛助会発足(現 全国青少年赤十字賛助奉仕団協議会)
献血推進に関し閣議決定

1966

昭和41年

使用済切手収集活動開始

1967

昭和42年

文部省から「公立義務教育諸学校が、青少年赤十字に加盟、指導することは、さしつかえない」との公文発表
青少年赤十字再建20周年記念東京大会、芝学園講堂にて開催
日本赤十字社創立90周年

1968

昭和43年

青少年赤十字再建20周年記念誌「あゆみ」発行

1969

昭和44年

青少年赤十字研究協議会内に「青少年赤十字推進委員会」設置

1970

昭和45年

東南アジア・太平洋地域青少年赤十字国際セミナー「こんにちは'70」開催(本社)

1972

昭和47年

25周年記念団員大会、芝学園講堂にて開催、国際親善をテーマに式典、パレードの実施(幼保から高校生メンバー500名参加)
本社青少年課長 橋本祐子氏 アンリー・デュナン記章を受章

1973

昭和48年

青少年赤十字登録費を廃止
上野動物園迷子奉仕ボランティアに高校生メンバーが加わる(現在まで)
東京都青少年赤十字賛助会設立

1974

昭和49年

地域青少年赤十字育成委員会設置
本社通知により、関係用語の読み替え(団員→メンバー／補導者→指導者等)
全国青少年赤十字メンバーが初めて100万人を超える

1975

昭和50年

全国車いすバスケット競技大会、私立佼成学園体育館にて開催(高校生メンバー31名協力)
幼・小・中・高校メンバー合同登録式、神田一橋講堂にて開催(393名参加)

地域青少年赤十字を計画的に発展させることを支部として決定

地域青少年赤十字指導者養成講習会開催

小・中学校のトレーニング・センターと同時に青少年赤十字、OB、一般学生などを対象とした講習会、妙義山ひしや旅館にて開催(16名開催)(S52まで)

メンバー増強5か年計画(第一次)開始

青少年赤十字研究協議会から青少年赤十字教育研究協議会に改称

1976

昭和51年

オーストラリア赤十字主催青少年赤十字大会及びアメリカ・ロスアンゼルス支部主催の国際プログラムに派遣(高校生メンバー各1名)
中・高校生メンバーおよび指導者、韓国親善訪問(S62まで)
荒川区南千住地区に地域青少年赤十字結成
日本赤十字社医療センター開設

1977

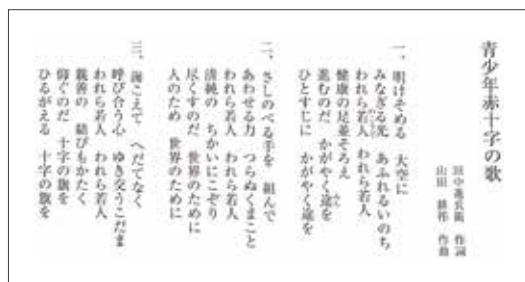
昭和52年

日本赤十字社創立100周年
日赤本社 新社屋落成

1978

昭和53年

東京都青少年赤十字30周年記念大会、科学技術館にて開催(450名参加)
記念誌「あゆみ」発行
再建30周年記念青少年赤十字全国大会、オリンピック記念青少年総合センターにて開催(本社)
私立高校生生徒対象救急法講習会新規開催(現在まで)
アンリー・デュナン生誕150年



青少年赤十字の歌



赤十字100周年
記念大会ポスター



再建20周年記念パレード



25周年記念団員大会
外国人メンバーのメッセージ



車いすバスケット



合同登録式



30周年記念誌「あゆみ」

1953

昭和28年

NHKでテレビ放送開始
英登山隊がエベレスト登頂に成功

1954

昭和29年

ジュネーブ極東平和会議開催

1961

昭和36年

ソ連 人間衛星ボストーク1号で人類初の宇宙飛行に成功

1964

昭和39年

第18回オリンピック東京大会
東海道新幹線開業

1965

昭和40年

ベトナム戦争 米軍北爆開始

1970

昭和45年

大阪で日本万国博覧会開催

1972

昭和47年

冬季オリンピック札幌大会開催
連合赤軍による浅間山荘事件
沖縄施政権返還
日中国交正常化

1973

昭和49年

パリでベトナム和平協定調印
第1次オイルショック

1974

昭和49年

ニクソン大統領がウォーターゲート事件で辞任

1975

昭和50年

山陽新幹線開業
ベトナム戦争終結

1976

昭和51年

ロッキード事件発覚
南北ベトナム統一

1977

昭和52年

領海12カイリ法、漁業水域200カイリ法成立
王選手が756本塁打の世界記録達成

1979

昭和54年

メンバー増強 5 か年計画の結果、54年度で150万人を超える、世界の青少年赤十字メンバー数約7,700万人

青少年赤十字賛助会から青少年赤十字全国賛助会に改称

1980

昭和55年

研究協力校 文京区立誠之小学校研究発表～実践力を高める青少年赤十字活動～開催(412名参観)
メンバー増強 5 か年計画(二次)開始
高校生徒連絡協議会にギフトボックス委員会設置、バングラデシュ等に文具発送(H2まで)



再建35周年記念大会

1982

昭和57年

青少年赤十字再建35周年記念大会式典、明治大学附属高等学校にて開催(600名参加)
全国青少年赤十字メンバー数180万人達成

1983

昭和58年

赤十字社連盟から赤十字・赤新月社連盟に改称
国際赤十字創設120周年記念「NHK海外たすけあい」キャンペーン開始(現在まで)

1984

昭和59年

青少年赤十字ベトナム難民親善サッカー試合、荒川七中グラウンドにて開催(100名参加)
韓国RCYメンバー8名、指導者2名招待、高校トレセン会場(入間青年の家)にて交歓会開催



青少年赤十字ベトナム難民親善サッカー試合

1986

昭和61年

海外メンバーと東京都メンバーの親善交流(オーストラリア、バングラデシュ、インドネシア、マレーシア、ネパール、タイのメンバー12名)

1987

昭和62年

ニュージーランド青少年赤十字メンバー(3名)との交歓会、支部大会議室にて開催(高校生18名参加)
小・中・高合同リーダーシップ・トレーニング・センター、茨城県水海道(みつかいどう)市あすなろの里にて開催(205名参加)
韓国RCYメンバー招待(10名)、中・高生と親善交歓を含む東京都支部創立100周年記念青少年海外研修派遣イタリア・スイス・フランス(メンバー8名参加)
東京都支部創立100周年記念赤十字大会、国立劇場にて開催(1,600名参加)



韓国RCYメンバーと親善交流

1988

昭和63年

東京都青少年赤十字再建40周年記念大会、東京都勤労福祉会館ホールにて開催(324名参加)
国際交流、記念誌「あゆみ」発行等
第2回青少年赤十字海外研修派遣ニュージーランド、オーストラリア(10名参加)
青少年赤十字再建40周年記念全国大会(御殿場東山荘)、海外11カ国青少年赤十字メンバーと交歓(約500名参加)(本社)

1989

昭和64年、平成元年

第3回青少年赤十字海外研修派遣ニュージーランド(13名参加)

1990

平成2年

第4回青少年赤十字海外研修派遣ニュージーランド(13名参加)
赤十字・赤新月社連盟から国際赤十字・赤新月社連盟に改称
地域青少年赤十字設置要綱作成



40周年記念誌

1991

平成3年

「地域青少年赤十字指導者手引き」発行(3月31日)
第5回青少年赤十字海外研修派遣オーストラリア(8名参加)

1992

平成4年

第6回青少年赤十字海外研修派遣オーストラリア(19名参加)
新宿区大久保に東京都支部新社屋(現支部社屋)落成

1993

平成5年

第7回青少年赤十字海外研修派遣ニュージーランド(19名参加)

1994

平成6年

第8回青少年赤十字海外派遣オーストラリア(22名参加)
青少年赤十字小学生国内派遣研修(熊本県)(16名参加)(H8まで)



東京都青少年赤十字再建40周年記念大会



第2回青少年赤十字海外研修派遣

1978

昭和53年

北京で日中平和友好条約調印

1979

昭和54年

東京サミット開催

1980

昭和55年

イラン・イラク戦争始まる

1982

昭和57年

フォークランド紛争
東北新幹線開業
上越新幹線開業

1983

昭和58年

大韓航空機撃墜事件発生

1984

昭和59年

NHK衛星テレビ放送開始

1985

昭和60年

日航機が群馬県御巢鷹山に墜落、死者520人

1986

昭和61年

ソ連でチェルノブイリ原発事故発生
大島三原山大噴火発生

1987

昭和62年

国鉄分割民営化
ニューヨーク株式市場大暴落：ブラックマンデー
レーガン・ゴルバチョフ会談、INF全廃条約調印

1988

昭和63年

本州・四国連絡橋瀬戸大橋開業

1989

昭和64年、平成元年

昭和天皇崩御、皇太子明仁親王即位：平成と改元

1990

平成2年

東西独統一

1991

平成3年

湾岸戦争突入
ソ連崩壊

1998

平成10年

赤十字奉仕団創設50周年・青少年赤十字創設75周年記念「健康とボランティアまつり」と「赤十字の絵」絵画展、オリンピック記念青少年総合センターにて開催・記念誌発行

1999

平成11年

東京都青少年赤十字賛助会から東京都青少年赤十字賛助奉仕団に移行

赤十字社連盟から国際赤十字・赤新月社連盟に改称

青少年赤十字海外派遣研修ラオス人民民主共和国(12名参加)

2000

平成12年

「総合的な学習の時間」が段階的に開始、青少年赤十字活動と関連付けて取り組む学校が多数
青少年赤十字海外交流事業モンゴル国(11名参加)
「青少年赤十字活動のすすめ」作成(賛助奉仕団作成協力)

2002

平成14年

青少年赤十字加盟推進員制度を廃止、青少年赤十字指導講師設置
東京・北京・ソウル赤十字三首都支部協議会、青少年赤十字交流事業開始
(中学・高校生対象)東京からスタート、毎年、東京→北京→ソウルと会場地を移し現在まで継続(但し2003年SARSウイルス拡大、2020・2021年新型コロナウイルス拡大のため中止)
(小学生対象)ギフトボックス交換プログラム(H15まで)
「総合的な学習の時間」指導者体験研修会開催

2004

平成16年

東京都青少年赤十字教育研究協議会から東京都青少年赤十字指導者協議会に改称

2005

平成17年

モンゴル衣料救援、ストリートチルドレン等救援のため子供用衣料をモンゴル赤十字社へ送付(H25まで)
愛知万博「国際赤十字・赤新月社バビリオン」出展
保護標章「レッドクリスタル」赤十字の国際会議にて採択

2006

平成18年

ギフトボックスプログラム
孤児及び脆弱子どもを励ます為、ジンバブエ赤十字社へ贈呈(H23まで)

2008

平成20年

全国青少年赤十字賛助奉仕団協議会設立

2009

平成21年

近衛忠輝社長がアジア地域から初めて国際赤十字・赤新月社連盟会長に就任
赤十字思想誕生150周年

2011

平成23年

東日本大震災の救援・救護活動

2013

平成25年

青少年赤十字活動支援員設置(H26まで)

2015

平成27年

防災教育プログラム「まもるいのち ひろめるぼうさい」発行
防災教育の普及開始(本社)
「東京都青少年赤十字活動事例集」作成(現在まで)
青少年赤十字活動活性化推進委員設置

2017

平成29年

三首都交流プログラム同窓会(1～15回参加者対象)、支部にて開催(80名参加)

2018

平成30年

幼稚園・保育所向け防災教材「ぼうさいまちがいさがし きけんはっけん!」作成(本社)

2020

令和2年

新型コロナウイルス感染症に対するこころの健康サポートガイド「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう!～負のスパイラルを断ち切るために～」公開、多くの学校で活用

2020

令和2年

新型コロナウイルス感染症の影響により、トレセン、三首都交流などの行事が中止
高校トレセン代替行事「ワークショップxチャレンジ」オンライン実施(40名参加)
登録式等学校への活動活性化推進委員の派遣中止(R3も同様)

2021

令和3年

令和2年度版「東京都青少年赤十字活動事例集～新型コロナウイルス特別編」発行
トレセン代替行事オンライン実施
小学校「家族で!赤十字防災デー」(6組家族12名参加)
中学校「リーダーシップ・チャレンジ」(28名参加)
高校「ワークショップxチャレンジ」(44名参加)

2022

令和4年

青少年赤十字創設100周年



「赤十字の絵」絵画展で入賞した子どもたち



総合的な学習の時間(福祉体験)



加盟校での国際交流会



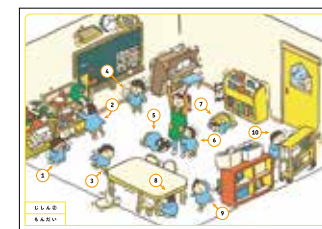
ギフトボックス・ジンバブエへ



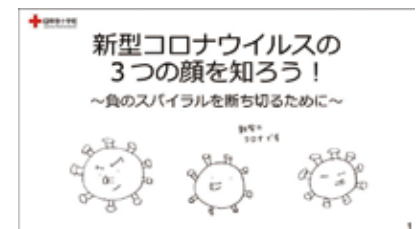
まもるいのち
ひろめるぼうさい



東京都青少年赤十字
活動事例集



ぼうさいまちがいさがし
きけんはっけん!



新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう!
～負のスパイラルを断ち切るために～

1993

平成5年

日本プロサッカーリーグ(Jリーグ)開幕

1995

平成7年

阪神・淡路大震災発生

1996

平成8年

ペルー日本大使公邸人質占拠事件

1997

平成9年

消費税5%に
香港返還
地球温暖化防止京都会議COP3
開催

2001

平成13年

アメリカ同時多発テロ

2002

平成14年

「総合的な学習の時間」創設

2003

平成15年

イラク戦争勃発

2004

平成16年

新潟県中越地震発生

2008

平成20年

リーマン・ショック

2011

平成23年

東日本大震災発生

2015

平成27年

仏紙銃撃事件

2016

平成28年

英国がEU離脱決定

2019

平成31年、令和元年

新型コロナウイルス感染症の流行

2021

令和3年

第32回オリンピック東京大会、第16回パラリンピック東京大会

「草創期」

1922年(大正11年)～1945年(昭和20年)

日本赤十字社の設立	14
少年赤十字の誕生	14
日本の少年赤十字のはじまり	15
少年赤十字の拡大	15
太平洋戦争へ	16

「復興・発展期」

1946年(昭和21年)～1988年(昭和63年)

重要な平時事業としての戦後復活	16
民主化課題のものと再建と制度改正	17
動きだした東京支部の青少年赤十字	17
転換期に立った青少年赤十字	19
団員増強 5 か年計画	20
青少年赤十字中央審議会の答申(組織方針の変更)	20
地域青少年赤十字の発足と目覚ましい活動	20

「見直し・工夫期」

1989年(平成元年)～2022年(令和4年)

青少年赤十字活動の見直し	21
「総合的な学習の時間」と青少年赤十字活動の推進	21
青少年赤十字活動の強化	21
ボランティア活動や自然災害に対する意識の高まり	22
「オリ・パラ教育」と青少年赤十字活動	23
パラリンピック正式競技「ボッチャ」の普及	24
新型コロナウイルス感染症の拡大	24
新型コロナウイルス禍での活動の工夫	24
「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！ ～負のスパイラルを断ち切るために～」	25

東京都青少年赤十字賛助奉仕団

東京の賛助会の発足	26
東京の賛助会の活動	26
賛助会から賛助奉仕団への移行	26
賛助奉仕団結成へ	27
VS活動の変遷	27
特別委員会	28
青少年赤十字活動活性化推進委員	29
コッハー女史の講演	29

草創期 | 1922年(大正11年)～1945年(昭和20年)

日本赤十字社の設立

1877年(明治10年)2月、九州で発生した西南戦争では、官軍と薩摩軍の間で激しい戦闘がくり広げられ、両軍で多数の死傷者を出した。しかし、負傷した兵士の多くは戦場に倒れたまま、十分な看護を受けられることもなかった。この悲惨な戦いに胸を痛めた元老院議員の佐野常民は、志を同じくした大給恒らとともに、敵味方の別なく傷病者救護を目的とした赤十字事業を日本でも興そうと決心した。

当時の政府は「敵味方の別なく救護する」ということには慎重であったため、九州に渡った佐野は熊本司令部にいた有栖川宮熾仁親王に博愛社設立の趣意書を提出し、その許可を得た。こうして設立されたのが、日本赤十字社(以後、「日赤」と表記する場合がある)の前身にあたる「博愛社」である。

その後、日本政府は、1886年(明治19年)6月にジュネー

ーブ条約に加入。そこで博愛社も1887年(明治20年)5月に社名を「日本赤十字社」と改め、同年9月に赤十字国際委員会の承認を受け、晴れて国際赤十字の一員となった。

少年赤十字の誕生

少年赤十字は、実際の体験の中から生まれたものである。イギリスとドイツを中心に、ヨーロッパを二分して戦った第一次世界大戦の最中1914年～1918



佐野常民

年(大正3～7年)、カナダ・アメリカ・オーストラリア・イタリアの児童・生徒たちが、戦場の悲惨な様子を思いやり、戦場の傷病兵や子ども達に、先生の指導のもとに、学校で作った慰問の品々を各国の赤十字社を通じ送ることにした。兵士達にはクリスマスカード・下着・医療用副木などを、子ども達には文具類など心のこもった品物が手紙を添えて贈られた。

やがて戦争が終結して、この奉仕活動は終息するかに見えたが、アメリカの子ども達の間で、このまま活動が続けようと、戦後のヨーロッパの人々や子ども達に自分達でできる範囲の援助をし続けた。この活動が世間に注目され、評価されて後「少年赤十字」に発展し、徐々に世界の子ども達に活動は広まった。そして現在の「青少年赤十字」の礎が出来上がっていった。

一方、これまでの戦時救護に加え、平時における健康増進等の分野に赤十字の活動の場を広げるため、1919年(大正8年)に各国赤十字社の連合体として、赤十字社連盟(現：国際赤十字・赤新月社連盟)を設立。第1回総会が1920年(大正9年)にスイスのジュネーブで開かれ、赤十字の事業の一つとして、「少年赤十字」を作ることが決定した。1922年(大正11年)3月、ジュネーブで開かれた第2回総会では、少年赤十字の重要性を掲げ、将来の赤十字活動の担い手を育てる意味でも各国の赤十字社に少年赤十字活動を行うよう勧告を行った。決議内容は次の通りである。

『少年赤十字は、自分及び他人の健康に対する関心を深め、その保持増進に努め、ボランティア精神を体得し、その実行に努め、公民としての義務を理解し、外国児童に対する友誼的援助の精神を養うことを目的に組織されなければならない。』

このように、少年赤十字は学校からの要請と赤十字の願いが一致した結果、誕生したものである。

日本の少年赤十字のはじまり

日本赤十字社は連盟での決議を受けて、率先して少年赤十字団の結成に努力する方針で準備を進めた。

第1回赤十字社連盟総会が開かれた翌年の1921年(大正10年)5月、日本赤十字社は本社規則を改正して調査部を新設し、同部の管掌事務に少年赤十字の一項を加えた。

第2回連盟総会での決議に重きをおき、この趣旨を児童に徹底させるため、次の3つの標語に要約して、これを日本赤十字社少年赤十字の原則にした。

- ①健康の保持増進
- ②良国民たるの理解体得
- ③赤十字博愛精神のかん養

日本赤十字社は少年赤十字に対する文部省の意向をき

くこととし、平山社長(当時)が文部当局と会見し、少年赤十字の目的趣旨、結団方法、事業の大綱をくわしく述べた。文部省は少年赤十字の趣旨目的を理解し、目的実現の方法が、国家の国民教育の方針になんら触れるところがないばかりか、国民教育のうえにもたらずであろうところの良好な影響を認め、この設置に賛意を表するとともに進んで奨励した。

これを受けて、日本赤十字社少年赤十字実施方を制定し、1922年(大正11年)5月5日、広く教育界や一般社会にむかって発表された。

日赤本社から少年赤十字の設置が発表された直後の5月18日に東京市本所区業平小学校の生徒350人が日赤本社を見学したとき、少年赤十字の趣旨が説明された。これが東京府内で直接児童に対して少年赤十字の宣伝を試みた第一声であったようである。



墨田区立業平小学校団員本社見学(大正12年)

少年赤十字の拡大

東京支部は1921年(大正10年)本社発表の規程により、1922年(大正11年)以来少年赤十字団を府下の全小学校に結成するため、府市郡当局の賛同と援助を要請した。1923年(大正12年)2月11日、東京市内は麻布区麻布小学校、牛込区余丁町小学校、八王子市八王子第一小学校、北多摩郡村山小学校、南葛飾郡小松川小学校の5小学校に最初の少年赤十字団を結成した。

1923年(大正12年)9月1日に発生した関東大震災において、結成間もない少年赤十字団は、この時初めての組織的な活動として救援に当たり、目覚ましい活躍ぶりをみせた。東京、神奈川の少年団員は、主として被災者収容所などで、食糧、飲料水、そのほか救援物資の運搬、受配等に協力するほか、団員自身が奮って応分の金品を出しあい、募金活動に当たった。また、広く各地方支部を通して寄せられた金品は、義援金8,000余円、教科書374,000余冊、文具類713,000余点、衣類13,000余点、慰問袋18,000余個に達した。

一方、震災の混乱で少年赤十字団の結成は一時中断したが、1925年(大正14年)に入り、少年赤十字団の結成はふたたび活発となり、1926年(昭和元年)12月末には、東京市内各区に結成され、その数39団、郡部および八王子市には11団が結成され、全体で51団に達した。団員数は約2万人。(当時全国では4,381団、99万人)支部ではひきつづきこの

結成のために努力し、近い将来府下600有余の全小学校に少年赤十字団を結成し、所期の目的を達成するようさらに努力することとした。各学校に結成された少年赤十字団は、少年赤十字の任務を理解し、様々な事業を実施し、多くの成果をあげつつあった。

1934年(昭和9年)に東京で開催された第15回赤十字国際会議には、少年赤十字も参加し、大いに活動を行い国内外にその存在が認められた。この会議を機に、少年赤十字



淀橋第四小学校の結団式(大正14年)

復興・発展期 | 1946年(昭和21年)～1988年(昭和63年)

第二次世界大戦の終戦を迎えた1946年(昭和21年)以降、戦後復興のなか、青少年赤十字は日本赤十字社の重要な平時事業として、学制改革に伴い再建されていく。この後、高度成長やベビーブームなどを経て再出発を図った青少年赤十字は、発展を遂げていくこととなる。

重要な平時事業としての戦後復活

1945年(昭和20年)8月15日、終戦。学校の多くは戦災にあい、あるいは併合・休校などで団員の去就も定かではなかった。戦争放棄を宣言した国の日本赤十字社としては、当然その事業の重点を、改めて平時主導型へ向け、一大転換する決意を固めるとともに、連合軍総司令部(GHQ)の派遣による米国赤十字社の援助を受け、全面的な平時事業への諸施策に取り組んだ。

東京支部は1946年度(昭和21年)の新規事業の一つとして「少年赤十字復活」を挙げたが、その文面には次のような言葉が見られる。「国際親善ト世界平和確立ノ一助トシテ少年赤十字ノ平和活動ヲ促進スルタメ、各国民学校ニ対シ此際少年赤十

字団は名称を「青少年赤十字」と改称するとともに、団員の対象も、中学校、高等女学校、青年学校を含むものに拡大された。

太平洋戦争へ

不幸にして1937年(昭和12年)に日中戦争、1941年(昭和16年)に第二次世界大戦が勃発した。この時期、団員の活動に、在外将兵への慰問金品の寄贈、赤十字救護班への慰問、国防献金、飛行機献納拠金などの軍色が添えられた。しかし、また一方、国内の災害救援、国際親善活動にも数々の実績を残した。1936年(昭和11年)から1940年(昭和15年)にかけての記録によると、「この間各地に起きた風水害、炭坑事故、地震、火災等の主なもの19件の被災地に対し贈られた義援金33,150余円、義援品30,871点…」とある。また、その頃、戦禍に苦しむ中国の学童に対して、慰問の活動が起こり、1939年(昭和14年)から15年にかけて、全国各地から寄せられた学用品は25万余点、慰問文1,550余通に達した、という記録が残されている。

1941年(昭和16年)、文部省の提唱で、各種の青少年団体は「大日本青少年団」に統合された。しかし、青少年赤十字団と海洋少年団が統合に加わらなかったことは、戦後の再出発に際し、関係者にとっては唯一の救いであった。

字団ノ設団ヲ奨励セントス」

さらに、1946年(昭和21年)6月22日、日赤本社は各支部に「青少年赤十字事業振興に関する件」を通知し、「終戦による本社重点事業の変更に伴い、重要な平時事業の一つとして青少年赤十字事業に力を注ぐべきこと」としている。この時期、青少年赤十字事業がいかに重要視されていたかが、言葉の節々にうかがえる。

東京支部は、青少年赤十字の趣旨普及のために、東京都教育局長の支援を得て、1946年(昭和21年)9月に行われた本社主催の「赤十字講演会」に228名の小中学校教員の参加者を送った。それとともに、都内の各校に設団、復活を呼びかけ組織の復興、再構築を進めた。

この頃行った具体的活動は、①傷病者慰問の花売り(支部主催赤十字デー)、②青少年赤十字ポスター展への出品(新日本建設国民運動に協力)、③アメリカン・スクールとの交歓会(支部主催赤十字平和祭)、④外国通信交換、⑤南海地震、東北地方風水害への義援金品の募集、寄贈、⑥食糧増産のための活動、などであった。

民主化課題もとの再建と制度改革

占領下、GHQの指導の下で、わが国政府は次々と民主化政策を打ち出していった。その一環として、1947年(昭和22年)3月31日に教育基本法、学校教育法が公布され6・3・3・4制へと移行した。こうした中で、日本赤十字社自体の事業のあり方も、新たな視点に立って、見直しの必要が生じてきた。

同年3月末、米国赤十字社から派遣された青少年赤十字専任顧問オードレイ・H・バセット女史により、「民主化」の観点から青少年赤十字団の組織変更について、指導・助言を得た。

このような時、いみじくも教育現場において、生徒たち自身から「青少年赤十字」について知りたいという動きが出てきた。当時、新制・港区立赤坂中学校の学校長であった繁田利男氏(故人)の記録によれば、「国語教科書の中に『国際親善』という章があり、青少年赤十字のことが簡単に紹介されていた。生徒たちからこのことについて、余りにも多くの質問があり、指導の高田平一教諭(元文京区立文林中学校長)にも未調査の点もあったので、放課後、生徒を日赤本社へ送り、グループ活動の調査研究を進めさせた。たまたまそこに来合わせていたバセット女史が眼をとめ、熱心な生徒たちの様子を観察していた……」という。

本社が「新制度」の検討をするにつき、東京支部に対し、赤坂中学校を実験校にするとの依頼があったのは、そのしばらく後のことであった。バセット女史は毎週2回、放課後学校に訪れ、各クラスのリーダーを集め15回にわたって赤十字の精神、青少年赤十字＝JRCの沿革、活動の実際について懇切に指導した。

赤坂中学校は、こうしたバセット女史や日赤関係者の指導を受け、青少年赤十字の国際性ゆたかな教育理念に



赤坂中学校 第1号登録証(昭和22年)

共鳴し、登録を申請した。本社が登録証「第1号」を同校に贈ったのは、1947年(昭和22年)10月下旬のことであった。こうして戦後、再建第1号の青少年赤十字の誕生は東京において実現したのである。

本社は、1948年(昭和23年)6月、文部省などの意見をいれて「青少年赤十字の手びき」をまとめ、各支部に通知した。これは再建の観点から、新制の青少年赤十字とはいかなるものかを示したものである。

まず、その目的を要約すると、①団員によい公民の意義を十分に理解体得させる、②団員の健康と安全とを保持増進する、③団員に郷土、社会、国家および世界に対する奉仕、親善の精神を育成する、というもので、さらに改正の要点は次のとおりである。

①青少年たちの意志で一校内の志望学級のみで行われる。②団議長と役員は生徒の中から選挙され、教師は補導者、校長は補導責任者になる。③小学校1年から高校3年まで団員になれる。小、中学校は全校または学年、学級単位、高校はクラブ単位。いずれも個人加盟不可。④幼稚園の加盟も認める。⑤毎年、参加の自由意志を新たにするため登録更新を行う。⑥登録費を徴収する(昭和48年に廃止)。⑦赤十字精神を根底に受け入れ、活動は学校教育の全領域に生かすように努める。

なお、昭和40年代後半に語句の読みかえが行われ、制度の基本的な考え方は現在も踏襲されている。

また、1947年(昭和22年)から青少年赤十字マークを決めて使用されるようになった。

1948年(昭和23年)主な制度の変更点

項目	戦前	戦後
団長	校長を団長にし、首席訓導を副団長にする	団議長と役員は生徒の中から選挙され、教師は補導者になり、校長は補導責任者になる
加盟範囲	団員は小学校5年以上からにする	小学校1年から高校3年まで、だれでも団員になれる。先生の覚悟次第で幼稚園の加盟をゆるす
登録	一度学校として登録したら、永久加盟	毎年、参加の自由意志を新たにするため登録更新を行う
領域	事業を中心に、教科外や校外活動を主にする	赤十字精神を根底にうけ入れ、活動は学校教育の全領域に生かすようにつとめる

出典：日本赤十字社社史稿第6巻

動きだした東京支部の青少年赤十字

東京支部においては、1948年(昭和23年)4月から全国的に再建青少年赤十字の登録受付が開始されたことから、この年は改組のための講演会(講師バセット女史)、説明会、新団登録勧奨に全力を注いだ。12月末の時点で14団

(小5, 中5, 高4)、団員数4,414人が新制度の下に登録され、ここに東京青少年赤十字団の再建の第一歩が記されたのであった。

このような関係者の熱意と指導により、新制度の成果は年々着実な歩みをみせ、東京都において、青少年赤十字に学級もしくは全校規模で加わった学校数(小、中、高)は、1948年度(昭和23年)加盟校15校、団員数4,592名から1953年度(昭和28年)加盟校70校、団員数16,516名と順調に増加傾向を示していった。

この頃、東京支部ならびに加盟各学校で行った主な活動は、次のようであった。

- ①**教育研究**—「青少年赤十字は、はたして实际教育にどう位置づけられ、理想に近づけられるのか」について授業参観などにより研究を加えた。
- ②**奉仕**—「赤十字子供の家」の訪問奉仕。赤十字一校内祝賀会。登録費充当のための墓地清掃。白い羽根の校内募金。米国赤十字青少年赤十字団から寄贈されたギフトボックス(10cm×8cm×23cm大の箱に石鹸、ハンカチ、文房具、玩具等を詰め合わせたもの)を、団員の手により、都内児童養護施設星美学園など33か所に配布したこと。そのほか国連軍傷病兵の慰問など。
- ③**親善・交歓**—本社および支部主催各種大会への参加、被災孤児の慰問、宿泊交歓会、国際・国内学校通信アルバム、絵画交歓など。



昭和天皇皇后両陛下 赤坂中学校青少年赤十字を視察(昭和25年)

昭和20年代中期から30年代にかけて、青少年赤十字は躍進期であった。昭和30年頃までは学校教育は社会科中心の風潮があり、その中での国際理解や親善、交流というところで、青少年赤十字の具体的な活動が、教育関係者によって注目された。そして、その後は、道徳教育や教科外の特別活動に重点が置かれるようになり、青少年赤十字

の活動事例や具体的実践活動が、教育現場での資料、あるいは児童・生徒の自治的組織活動として関心を集めた。このようなことから、青少年赤十字は加盟校、メンバー数とも徐々に増加傾向を示したのであった。

こうした躍進はまた、青少年赤十字の内容の充実、情報交換などの支部の活動、教育行政機関の後援、学校現場の協力、さらには団員の自主的連絡、運営などの制度面での充実によって支えられたものでもあった。

東京支部は1949年(昭和24年)4月、「青少年赤十字支部協議会」(団員協議会、または連絡協議会とも呼ばれる)を発足させた。これは、団員(生徒)の組織で、その目的は「東京支部に登録した青少年赤十字団相互間の連絡親睦向上を計る機関として活動することにある。毎月、常設協議会が開かれ、役員の選挙や児童養護施設訪問、大会などの打ち合わせが行われるようになった。この組織は、現在も「東京都青少年赤十字メンバー連絡協議会」として、年に6回、都内の中高生メンバーの交流の場として、活動活性化の一助となっている。

続いて東京支部は1951年(昭和26年)1月には、「日本赤十字社東京支部青少年赤十字運営委員会」を発足させた。これは、青少年赤十字のあり方(団の結成、適切な運営、活動)についての研究機関(企画、協議)であると同時に、支部長の諮問に応じて意見を開陳する機関、という性格を持つものであった。

教育行政当局の後援は、戦前の少年赤十字団の発足以来、持続的に行われているものだが、1951年(昭和26年)7月には、東京都教育長が公文書で、青少年赤十字の教育上の意義を認め、管内行政機関の長および各



沖縄の中学生へ教科書を贈る 赤羽中学生徒(昭和27年)

各学校長、同年9月には、総務局学務課長名で私立各小中高校長あてに青少年赤十字結成を奨励した。これは、教師が教育現場で赤十字の教材や活動を活用することを改めて公認したもので、学校に基盤を持つ青少年赤十字の前進に役立つものであった。こうした前進的機運の中で、1953年(昭和28年)9月に開かれた「第18回運営委員会」は、運営委員会の充実強化と各学校別の補導者研究会設置について決議を行った。これは、研究・諮問機能的性格の「運営委員会」を発展的に解消させて、より積極的に青少年赤十字の基礎的推進方策を立てていくような組織を

つくり出そうという動きであった。こうして10月に「東京都青少年赤十字研究協議会」(現「東京都青少年赤十字指導者協議会」)が発足した。初代会長は、都教育庁指導部の黒沢得男主査である。研究協議会は、高等学校、中学校、小学校別に研究部会、そして地域ブロック会、運営委員会という体制で活動を開始した。現在でも、東京都教育庁指導部長を会長とし、活動を続けている。

転換期に立った青少年赤十字

だが、東京都支部の青少年赤十字は、1965年(昭和40年)に加盟校177(幼稚園4、小学校43、中学校40、高校90)、団員数33,291名でピークに達し、その後は全国の各支部と同様、増強の動きは停滞状態か下降傾向を示した。

本社の見解によれば、停滞をもたらした遠因の一つは、1958年(昭和33年)の学習指導要領の改訂にあった。以来、教育内容の増加に伴って、児童・生徒の自主的活動時間が縮小され、また教師の労働条件に関する問題で、放課後の児童・生徒の活動が指導しにくい状況となったことなどを述べている。こうした背景の中で、「JRCがなくても、学校教育は完全に行われる」「JRCは余計な負担になるのではない」「学習指導、学級経営が完全ならばJRCはいらない」「奉仕という考え方を強制するのはよくない」などの意見や誤解、偏見も加わり、持ち込み行事視されたり、担当教師の特技的指導活動とみなされたりしたのである。また、校内で後継の指導者の教育が不足したことも、停滞の原因であった。戦後の青少年赤十字は教師が自発的意思で賛同することが前提であり、しかも毎年登録式を更新しなくてはならないが、そのような教師の退職後、再登録しなくなる事例が生じる。そして新たな加盟登録の動員には相当のエネルギーを要する…などとして、昭和40年以降の停滞的局面をもたらしたのである。



千葉県成東小学校との交歓会、王子小団員(昭和40年)

こうした困難な局面に当たり、東京都青少年赤十字研究協議会会長を務めた東京都教育長小尾席雄は1966年(昭和41年)12月27日、文部省初等中等教育局長に対し、①公立の義務教育諸学校が児童生徒を青少年赤十字へ加盟させることがで



デュナン像に献花、再建20周年大会
(芝学園講堂 昭和42年)

きるか、②公立の義務教育諸学校が学校教育の中で青少年赤十字が提供する教材を利用できるか、の2点について行政当局の見解をただした。

これに対する文部省斉藤正初等中等教育局長の回答。

- ①「日本青少年赤十字は、その沿革、目的、性格およびその活動の実情よりみて、青少年の健全育成活動を行う団体であると認められるので、公立義務教育諸学校においても、児童生徒が保護者の同意を得てこれに加盟するよう、教育的配慮のもとに指導することはさしつかえない」
- ②「校長が、学校教育の目的を達成するうえで有効であると判断した場合は、日本青少年赤十字が提供するものを学校教育の教材として利用することはさしつかえない。この場合、学校管理規則の定めるところにしたがって教育委員会の承認を受け、また届出をなすことが必要である」

この回答は全国各支部における青少年赤十字の推進を大いに勇気づけるものであった。



30周年記念大会科学技術館(昭和53年)

団員増強5か年計画

登録団員数と加盟校数は、戦後の再出発から約10年は概ね拡大がみられ、全国の青少年赤十字団員は、1964年(昭和39年)では95万人であった。しかし、昭和40年代(1965～1974年)当初、学習指導要領の改訂に伴う児童生徒の自主的な活動時間の縮小や教師の労働時間にかかわる規定の設定など学校教育をめぐる諸般の事情から全国的に漸減した。日赤本社ではこの状況を打開するため、1970年度(昭和45年)を第1年次とする団員増強5か年計画を全国で展開した。

第3次に及び長期的増強計画の推進にあたり、東京都支部では、指導者向けの手引きの作成や、各区の教育委員会の協力のもと青少年赤十字研究協力校の委託、また、教職経験者(主に賛助奉仕団)を加盟推進委員として委嘱して加盟勧奨を行うなどの活動により団員増強を図った。こうして、1985年(昭和60年)度末には、10年間で全国の団員数180%増を達成し、198万5千人の増強を果たしている。

青少年赤十字中央審議会の答申(組織方針の変更)

日赤本社は1971年(昭和46年)7月、社長の諮問機関として、教育事情に適した青少年赤十字の在り方や振興のための具体的な方策について教育関係の有識者25名を委員とする「青少年赤十字中央審議会」を設置した。

答申はまず、青少年赤十字の目的は、学校教育の目標と合致している点を強調し、これを「健康・安全」、「奉仕」、「国際理解・親善」の3点にまとめ、また、昭和40年以降の団員漸減傾向についての問題点を指摘するとともに、改めて指導者養成の必要性、方策、情報資料の整備等に言及している。続いて、青少年赤十字のあり方にふれ、従来からの学校を場として進めてきた効果を評価し、今後もこれを必要、かつ適切であるとしたうえで、なお、学校外での活動をも早急に研究する必要があると指摘している。これにより、1973年(昭和48年度)からの登録費の廃止、呼称の改訂が行われた。

地域青少年赤十字の発足と目覚ましい活動

「青少年赤十字中央審議会」の答申を受け、青少年赤十字協議会は、1975年(昭和50年)、第2次5か年計画の策定に当たり、その重点事業の一つとして、地域青少年赤十字の活動を挙げ、特別委員会に取り組んだ。体験と実践教育の場を地域に求め、委員会を中心に組織作りと活動が進められた。1976年(昭和51年)、7月に荒川区青少年赤十字研究協議会の下に、荒川区立南千住地域内に、初めて地域青少年赤十字が誕生した。

東京都の地域青少年赤十字の活動は、全国的には見ら

れない特色あるものとして、メンバー増強5か年計画の一翼になった。



教諭対象 指導者養成研究会 実技救急指導 昭和62年



韓国RCY高校メンバーとの親善交歓風景(あすなろの星 昭和62年7月)



東京都青少年赤十字再建40周年大会(東京都勤労福祉会館 昭和63年2月)

見直し・工夫期 | 1989年(平成元年)～2022年(令和4年)

青少年赤十字活動の見直し

平成に入ると、経済・社会のグローバル化、情報技術の発展など生活環境が大きく変化して来た。児童生徒は物質的には豊かさの中にありながら、耐える力の弱さや、価値観の多様化に伴う規範意識の低下等が課題となり、学校教育は、校内暴力、いじめ、不登校、自殺等々の幾多の問題を抱えるようになってきた。さらに1993年(平成5年)9月より段階的に進められてきた学校週5日制が、2002年(平成14年)4月から完全週5日制に移行され、新しい学力観と共に進められてきた総合的な学習の時間についても、授業時数の減少に伴い、教科、道徳、外国語、特別活動と共に教育内容の厳選が図られることとなった。このような中で青少年赤十字活動を進めるために、東京都支部では、一層の見直しと工夫に取り組んでいった。とりわけ、2000年(平成12年)から始まった「総合的な学習の時間」については、学習指導要領等に例示されている内容と、青少年赤十字の実践目標・態度目標を関連付け、各学校での学習に青少年赤十字を取り入れてもらおうと働きかけた。また、「心の教育」の推進に道徳での道徳的実践力の育成や特別活動における自主的・実践的な態度の育成にも、賛助奉仕団の協力を得ながら、青少年赤十字の「気づき・考え・実行する」(態度目標)との関連に力を注ぎ工夫をしていった。

「総合的な学習の時間」と青少年赤十字活動の推進

2000年(平成12年)東京都支部では賛助奉仕団に委託



リーフレット「青少年赤十字活動のすすめ」

し、リーフレット「青少年赤十字活動のすすめ」を作成。支部長(都知事)から委嘱された加盟推進員(賛助奉仕団員から9名)が都内の各地を分担して学校訪問、青少年赤十字のねらいと加盟のメリット、総合的な学習の時間との関連、教材や人材派遣を資料を基に各校長に説明、加盟への働きかけをしていった。

また「登録校のための青少年赤十字活動プログラム」を新たに冊子にまとめ、青少年赤十字講師派遣一覧・青少年赤十字貸し出し資料一覧・希望配布資料・貸出視聴覚教材(ビデオ)・<講師派遣一覧の参考資料>・各申込用紙を添え、全加盟校に配布した。このプログラム一覧は、毎年改定しており、加盟校にとっても便利に活用され、講師や資料・資料の申し込みに利用されている。(現在は、1998年(平成10年)度より開設された青少年赤十字のホームページにも掲載)

2002年(平成14年)8月に「総合的な学習の時間」指導者体験研修会を初めて開催。赤十字活動を取り入れた「総合的な学習の時間」の事例の紹介の後、福祉体験・こども救急法・国際人道法・にこにこ健康教室の体験に150余名の現職教員が参加した。要望が多く12月に2回目を実施73名が参加。災害救護学習(非常炊き出し)と妊婦体験を加え選択できるようにした。2003年(平成15年)も新たなプログラムを入れ、夏休み・冬休みの2回開催した。



「総合的な学習の時間」福祉体験 平成15年

青少年赤十字活動の強化

2003年(平成15年)の全国の調査をもとに、2005年(平成17年(3月))に本社から青少年赤十字活動強化要綱と各

支部の調査結果の概要が出された。

- ・青少年赤十字活動の理念・目標の意識の向上
- ・青少年赤十字活動の実施方法
- ・青少年赤十字メンバー及び指導者・支援者の養成
- ・行政等への働きかけ

など、具体的に取り組む課題が示された。

2002年(平成14年)東京都支部では、各部署での効果的、効率的な活動に向け、事業の活性化とスクラップ・アンド・ビルドが推進され、青少年係でも、今までの青少年赤十字加盟推進員の制度を廃止し、新たに青少年赤十字指導講師の名称で、非常勤嘱託が設けられた。構成員は今までと変わらず青少年赤十字活動に携わっていた元教職員(賛助奉仕団員)で、年齢に上限を設けて若返りが図られた。人数は9名から4名に削減となった。(平成24年からは2名)

青少年赤十字活動の充実強化のため、各加盟校での登録式や各種行事などに東京都支部の代表として出席、新規加盟校の推進活動も行った。新設された学習指導要領の「総合的な学習の時間」に対して日本赤十字社東京都支部としても支援の方策について、資料やプログラムの提供を検討し、出張授業や講演の依頼等に伴う人材派遣に努めた。

2004年(平成16年)東京都青少年赤十字研究協議会を東京都青少年赤十字指導者協議会に名称を変更。会長には、東京都教育庁指導部 近藤精一指導部長、副会長に東京都生活文化局 中澤正明私学部長、東京都教育庁指導部 巽公一企画課長が就任。1953年(昭和28年)の発足当時より、東京都教育庁との連携を図ってきている。

東京都教育委員会の公立学校教員10年経験者研修(現在中堅教諭等資質向上研修)の受け入れも実施している。

2006年(平成18年)3月に東京都支部は、赤十字活性化総合戦略を作成。青少年赤十字の拡充に取り組んだ。

6月26日「校長・副校長対象 東京都青少年赤十字説明会」～「実践的な心の教育」を目指して～を開催。136名が参加。東京都青少年赤十字指導者協議会 岩佐哲男会長(東京都教育庁指導部指導部長)から「今、求められている学校教育と、気づき・考え・実行する青少年赤十字活動」の講演があり、「青少年赤十字活動は青少年の健全育成に役立つもので、東京都のすすめている『心の教育革命』の精神と合致する。加盟して青少年赤十字活動のプログラムを是非活用してほしい」と参加した校長・副校長に語りかけた。

2007年(平成19年)は8月21日に開催。101名が参加。(未加盟校67.3%)平成20年度も継続。研修会のプログラムを工夫し、参加対象者や開催時期なども検討し実施していく。

ボランティア活動や自然災害に対する意識の高まり

1995年(平成7年)1月17日に発生した阪神・淡路大震災を契機に市民による災害ボランティア活動が進められるようになってきた。また2004年(平成16年)新潟県中越地震が発生、東京都でも大規模地震を想定、各学校・地域での防災訓練や避難所運営等の計画を進めていった。そして、2011年(平成23年)3月11日東日本大震災が発生。その活動は更にひろがった。青少年赤十字加盟校では、募金活動や被災地への励ましなど、多くのボランティア活動が展開された。同時に、大規模な自然災害に備え、災害に関する正しい知識を学ぶ中で、「自分の命は自分で守る」という防災意識が高まってきた。

加盟中学校で、避難所宿泊体験をし、救急法や炊き出し訓練をしたり、校内にレスキュー部を立ち上げ、地域の防災活動と連携し絆を大切にする学校も出てきた。東京都支部でも、首都直下型地震を想定し、全国に先駆けて2012年(平成24年)から学校を含む都民への防災セミナーを開始。防災教育プログラム(学校プログラム)として学校を訪問し、災害から命を守るための、応急手当や避難所生活について講演、加盟校の増加にも繋がっていった。



荒川区立南千住第二中学校

日本赤十字社は、2015年(平成27年)1月に青少年赤十字防災教育プログラム「まもるいのち ひろめるぼうさい(通称;まもひろ)」を制作し、学校教育で活用され防災教育が充実することを期待した。

都支部でも都内全校に配布し、防災教育研修会を開催。「まもるいのち ひろめるぼうさい」の活用法の紹介、グループワークの体験研修も組み入れた。

平成28年度には、防災教育指導者研修会(支部主催3回)・10年経験者研修「社会体験研修」(東京都教職員研修



「魔法の携帯トイレ」パッケージ

「まもるいのち ひろめるぼうさい」



携帯トイレの使用方法を確認

センターからの依頼)・学校安全教育指導者講習会(東京都教育庁主催2回)・各区市教育委員会依頼の研修会(北区校長・園長会・防災安全担当職員研修会・墨田区副校長会・大田区生活指導主任研修会・荒川区教育研究会等)へ講師を派遣して、「まもひろ」の普及促進に取り組んだ。

平成29年3月の青少年赤十字活動説明会で、目黒星美学園中学高等学校が取り組む「災害時のトイレ問題」に関するワークショップを生徒が講師となり実施。災害時のトイレの大切さ、携帯トイレの作成方法等を参加した指導者に伝えた。平成29年度のメンバー連絡協議会でワークショップを重ね、作り方の伝達やPR方法等を考え、平成30年6月から、青少年赤十字活動や地域の方々が参加する防災訓練の一環として「魔法の携帯トイレの作成」を都支部で取り組むこととなった。

地震災害だけでなく異常気象による風水害(河川の氾濫や土砂崩れ等の豪雨災害)も増え、学校・地域・家庭での防災意識も広がり、「まもひろ」の学習の後に、赤十字防災セミナー(学校防災コース)と合わせ救急法等の実施訓練や災害時に備える活動を実践している学校も増えてきている。

平成30年に日本赤十字社で作成された幼稚園・保育園

向け防災教材「ぼうさいまちがいさがし きけんはっけん」も、幼稚園・保育園だけでなく、小学校低学年でも活用でき、支部主催の防災研修会や活動説明会で紹介し普及に取り組んでいる。

2021年(令和3年)のオンライン体験学習「家族で！赤十字防災デー」の体験ワーク「みんなでそなえよう！災害時のトイレ体験」では、家族で携帯トイレの作成に取り組んだ。

東京都教育委員会の防災教育のホームページで、防災教育教材の紹介に「まもひろ」が採り上げられている。都支部ホームページでは、「まもひろ」の活用方法を動画で掲載。8月末から9月にかけて、「まもひろWEEK」として特設ページを開設している。

「オリ・パラ教育」と青少年赤十字活動

2016年(平成28年)から都内全ての公立学校で「東京都オリンピック・パラリンピック教育」が実施された。年間35時間程度を目安に、ボランティアマインド・障害者理解・スポーツ志向・日本人としての自覚と誇り・豊かな国際感覚の育成を「学校2020レガシー」として取り組むよう推進された。

加盟校から、障害者福祉体験・国際理解教育の講師派遣等問い合わせも多くなり、各学校の活動の中に青少年赤十字活動で実践してきたことが生かされる機会となった。

都支部でも「赤十字クリーンプロジェクト」を東京都オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の応援プログラムとして立ち上げた。「奉仕」「国際理解・親善」の一環として地域清掃をすることで奉仕の心を育て、地域に対する理解と関心を深めることやオリ・パラの学習



赤十字クリーンプロジェクト

や競技観戦を通じて多様性や世界とのつながりを感じることをねらいとし、地域の赤十字ボランティアと連携しながら取り組んだ。参加ボランティア団体代表との打ち合わせをし、青少年赤十字マークと応援プロジェクトマーク入りのビブスを着用して活動。統一行動日だけでなく、各学校・地域での地域清掃や行事にビブスを着用し、活動がひろがり始めた。第1回の武蔵の森公園からのロードレース、第2回のマラソンMGC(テストイベント)コース沿道に近い加盟校と連携しながら進めてきたが、第3回の東京マラソンからは、新型コロナウイルスの感染拡大の状況から統一行動日としての活動も見合わせとなった。

パラリンピック正式競技「ボッチャ」の普及

2019年(令和元年)度から、加盟校への貸し出し資材として、ボッチャの競技用セットを購入。障害の有無に関わらず、老若男女、誰でも楽しむことができ、交流活動に活かせることも期待した。11月9日のメンバー連絡協議会

令和2年度板橋区立金沢小学校でのボッチャ体験授業



ボッチャの体験



車椅子体験とあわせて

で、「ボッチャ体験&福祉体験」～パラリンピックを通して共生社会を考えよう～をテーマに開催。ボッチャの体験活動を通して、充実した会となり各学校への普及活動が始まった。都支部職員の中でのボッチャ体験会で、シンプルなルールで誰もが参加でき、年齢を問わず楽しめ、場の設定やルールの説明の仕方などの研修の場となった。また、学校でのボッチャ体験教室も実施され、異学年交流や車椅子体験と合わせての活動も進められた。

新型コロナウイルス感染症の拡大

2020年(令和2年)2月6日、東京都青少年赤十字指導者協議会総会で令和2年度の活動計画を決定し、全加盟校に、3月末の青少年赤十字活動説明会の案内と登録継続確認票を送付し、東京2020オリンピック・パラリンピックと合わせての活動を進めようとしていた。

しかし、横浜港に停泊したクルーズ船での集団感染から、新型コロナウイルスの感染が広がり、日本赤十字社では、医療チームを派遣、最前線でのいのちを救う医療活動を続けていくこととなった。

新型コロナウイルスの感染拡大状況から、支部での開催予定の研修会をはじめ全ての行事が活動見合わせとなった。ボランティアセッションや、地域での赤十字ボランティア活動も中止。3月から学校は異例の一斉休校に。年度末を控え、修了式・卒業式の各学校での対応を迫られた。更に4月7日第1回緊急事態宣言の発令により、新年度の始業式・入学式から、新型コロナウイルス感染対策とそれに対応した教育活動(ITCの活用と、感染症や災害の発生等乗り越えて学びを保証する)のすすめ方に取り組むこととなった。

新型コロナウイルス禍での活動の工夫

例年の4月からの登録式の講師派遣も中止。令和2年5月以降の希望園・校には、支部の指導講師による講話を映像化し、動画や資料を配布することで代替えとした。上野動物園の迷子ボランティアや、宿泊を伴うリーダーシップ・トレーニング・センター、韓国ソウルを訪れる予定の三首都交流事業も中止となった。

この間、日本中でオンラインへの転換が推奨され、日赤本社も指導者協議会をはじめとする各種会議や研修会をオンラインで実施。都支部でも、都内各校のICT活用が進んできていることもあり、オンラインでの活動を始めた。慣れるまでは困惑することもあったが、全国どこにいても瞬時につながることができ、有効な手段であることを実感した。

学校へのオンライン「災害学習プログラム」を開始。い

つ起こるかわからない自然災害に、画面越しでの児童・生徒への防災教育に取り組んだ。また、中・高生を対象とした青少年赤十字メンバー連絡協議会もオンラインで実施。デジタル世代の生徒たちにとっては、簡単につながり有意義な交流の場となった。

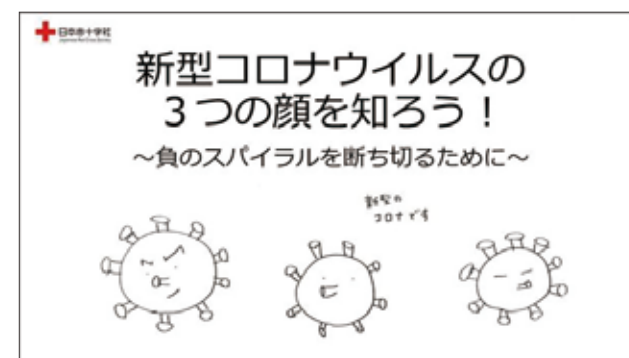
2020年(令和2年)のオリンピック・パラリンピックの開催が1年延期となり、コロナの収束が見通せない中、活動の工夫が更に求められた。指導者協議会の役員会やトレセンの各校種ごとの打ち合わせ会等もオンラインで開催。各学校からの出席で時間的にも有意義に進められた。限られた状況下で、今できることを工夫しながら取り組んだ。

「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう!～負のスパイラルを断ち切るために～」

日本赤十字社が2020年(令和2年)3月末に作成した教材。

感染拡大に伴い、ウイルスへの不安から生じる偏見や差別に対して、文部科学省の「新型コロナウイルス感染症の予防」(2020年3月初版)保健教育指導資料に取り上げられ、東京都教職員研修センターの「新型コロナウイルス感染症に関連する偏見や差別意識の解消を図る指導資料」生徒用教材として各学校に周知された。各学校では、学校便りや授業での指導に取り上げ、その実践報告が支部にも届いた。人権教育研修会での紹介や、実際に起きている学校での差別や偏見についての指導の交流でも活用され、「感染のリスクを背負いながら働いてくださる方々に感謝の気持ちを伝えよう」「感染した子どもが出た学級では、温かく見守り、元気になるのを待っているからね。」と声をかけていくことなどが話された。

支部に届けられた医療従事者への感謝のメッセージ等を、コロナ対応をしている日赤の病院へ届けると、病院の医療従事者から写真やお礼のメッセージが支部に届く事



「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう!～負のスパイラルを断ち切るために～」

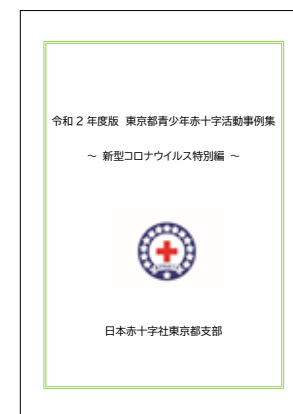
がある。そのつど学校へ知らせ写真やメッセージを送ると、学校便りや朝会で子どもたちへ紹介された。

令和2年度版 東京都青少年赤十字活動事例集「～新型コロナウイルス特別篇～」として、2021年(令和3年)2月1日にコロナ禍での加盟校11校の活動と4つの支部主催事業と資料をまとめ発行。青少年赤十字指導者協議会総会の資料とするとともに、都支部全加盟校へ送付した。

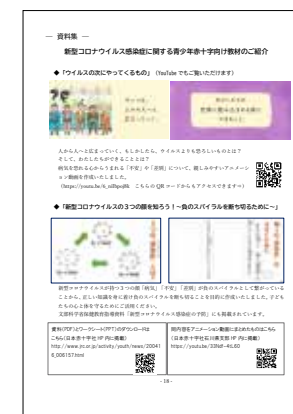
2021年(令和3年)度は、オリ・パラ開催を前提に計画、指導者養成研修会の会場を都内4会場で開催する工夫などに取り組み計画を立てたが、コロナ感染症の収束が見られず再度の緊急事態宣言が発令されたため、中止となった。学校は休校とはせず「学校の新しい生活様式」の確認と継続をしながら教育活動を進めている。

2021年(令和3年)7月23日～8月8日東京2020オリンピック・8月24日～9月5日パラリンピックが無観客で開催された。「オリ・パラ教育」の一環としていたパラリンピックの学校観戦は、各学校保護者の判断に任せられ、当初希望より少ない児童の観戦となった。「学校2020レガシー」として教育活動を進めていく中に、100周年を迎える青少年赤十字活動も進めていきたい。

『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』の答申が2021年(令和3年)1月26日中央教育審議会から示された。この中で提言されている「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら～」は、青少年赤十字が目指すところと一致しており、どのような状況の中でも、青少年赤十字は「学校教育を通して、子どもたちに「いのちの大切さ」を伝え」「やさしさとおもいやりの心を育む」活動を工夫し続けていく。



令和2年度活動事例集 新型コロナウイルス特別編



東京都青少年赤十字賛助奉仕団

東京の賛助会の発足

東京都青少年赤十字賛助会は、1972年(昭和48年)4月16日に産声をあげた。全国賛助会発足から10年の遅れがあったが、東京でも結成の気運が高まり、市ヶ谷の私学会館で24人の参加を得て設立総会が開催された。初代会長に実方亀寿氏(トキワ松学園高校長)が選出され、「賛助会の活動の課題は何か」を中心テーマとして指導者協議会(補導者協議会から1974年(昭和49年)に名称変更)との連携強化等の討議が展開された。

東京の賛助会の活動

全国賛助会の各支部事務局長宛てに会の成立が報告された当初から、会員は地域で催される講習会、加盟登録式、青少年赤十字大会、同全国大会、研究発表会等につとめて参加すること、信念を持って活動できるよう「研修」を怠らないことという信条を基に活動が進められた。

1979年(昭和54年)には、第1回の研修旅行として静岡県稲取小学校を訪問している。その後も、旅行委員会を組織して毎年研修旅行が続けられ、他県との交流、団員相互の親睦の実を挙げてきた。

明治高等学校の青少年赤十字が実施していた韓国・釜山の東大東学園高等学校との交流事業にも合流させてもらい、1976年(昭和51年)から1991年(平成3年)まで、12回にも及ぶ国際親善交流・研修も記録に値する。



韓国・釜山(昭和51年)

1985年(昭和60年)、「賛助会として加盟増強に協力するために何ができるか」について会員にアンケートを求め、研究課題とした。1986年(昭和61年)から青少年赤十字の普及・啓発資料の作成に着手。研究紀要の第1集として「青少年赤十字活動問答集」「資料集」、1988年(昭和63年)には第2集「幼児教育、ジュネーブ条約、アンリー・デュナン等の資料」の発刊を見た。

以後、研究・研修活動も進み1989年(平成元年)に「奉仕クラブの活動」、さらには「イトスギの教材化を図り、育苗・配布の活動」に入った。1990年(平成2年)には、研究紀要第3集「イトスギ、青少年赤十字記念樹」が完成した。

イトスギは、1972年(昭和47年)青少年赤十字再建25周年記念事業として全国青少年赤十字補導者協議会が実

施した「アンリー・デュナン遺跡視察旅行」で、記念にソルフェリーノの丘から持ち帰った種子を、協議会が加盟校に配分を決議したことに始まる。東京では、配分を受けたその種子を、農林省関東東林木育種場で苗木にしてもらい、1977年(昭和52年)、200本を23校の加盟校に配布した。1989年(平成元年)に、12年後の育成状況を調査し、50本の現存数を確認した。

1992年(平成4年)全国賛助会からの依頼で、東京が、ソルフェリーノの丘に3本のイトスギを配した会員章(バッジ)を作成した。1995年(平成7年)に創刊された全国賛助会報「いとすぎ」は、会員章に因んだ命名である。

1992年(平成4年)から、東京都支部の委託を受け、教材開発委員会を設けて、リーフレット「国際理解・親善の進め方」を作成した。さらに1995年(平成7年)に「健康・安全の進め方」、1996年(平成8年)に「奉仕の進め方」を作成し、青少年赤十字の実践目標に対する3部作が完成した。1998年(平成10年)には「東京の赤十字史跡と資料」もできあがり、会員の自主研修にも大いに役立つものとなった。

会としての懸案でもあった「東京都青少年赤十字賛助会報とうきょう」が、1996年(平成8年)12月に創刊となった。会員相互の情報交換、意見交換の場としてこの上なく重要であり、会の活動を永く記録するツールとしても欠くことのできないものとして大切なものができた。

賛助会から賛助奉仕団への移行

東京都青少年赤十字賛助会は、発足以来25年、青少年赤十字教育研究協議会と提携し、日本赤十字社東京都支部の青少年赤十字活動の啓発と加盟促進に協力し、活動を推進してきた。

しかし、賛助会は、赤十字組織の中ではどこにも位置づけされない、単なる同窓会的な任意団体の立場でしかなかった。賛助会の信条である青少年赤十字の充実発展に



イトスギ、青少年赤十字記念樹



会員章

協力奉仕すること、赤十字思想の普及啓発に努め平和な社会の実現に寄与すること、会員相互の研修を深めること等を具現化するためには、教職にあった専門性を生かし、「特殊奉仕団」として赤十字組織に所属して活動することが大切なのではないかと考えられた。

賛助奉仕団結成へ

1997年(平成9年)9月の全国賛助会総会で、徳島県が賛助会規約を改正し、全国に先がけて「賛助奉仕団」と名称を変更するとの報告があった。

東京でも1992年(平成4年)頃から賛助会規約見直しの必要性和奉仕団への移行についてしばしば話題となっていたが、この徳島県からの報告で、東京も一気に改正への気運が高まっていった。1997年(平成9年)度中に7人で組織委員会を立ちあげ、規約の改正、会計処理の問題その他、考えられる数数の問題点をあげ、議論が進められた。規約については、折から東京都支部でも整備の進められていた「特別奉仕団規程準則」(案)や、本社の提示した準則、諸通知などを参考に、東京都支部田角章一ボランティア課長(当時)の多大なご指導、ご協力を得ながら、1999年(平成11年)2月、規約検討会の最終討議を経て、一応の成案を見た。

1998年(平成10年)度の定期総会で、賛助奉仕団への移行は承認が得られており、理事会で具体的な移行手続き等の検討ののち、1999年(平成11年)6月4日の結団式挙行となった。結団式では、東京都支部森野亮一事務局長から高橋榮初代委員長に奉仕団旗が手渡され、東京都青少年赤十字賛助奉仕団が晴れて赤十字組織の中の、特殊奉仕団として、第一歩を踏み出したのである。

賛助奉仕団への移行は、徳島県に続く全国2例目であったが、1999年(平成11年)度全国賛助会総会で、東京の賛助奉仕団結成に関し、他府県から多くの質問が寄せられた。特に第2ブロックの協議会では、この問題に議論が集中し関心の高さをうかがわせた。

VS活動の変遷

奉仕団として赤十字組織の中に位置づけられたからには、教職に身を置いていた専門性を生かした活動の推進を心がけることはもちろん、学校現場や本団を取り巻く周囲のニーズにも応じたVS活動を提供していくことが、賛助奉仕団の目的遂行上より適切なのではないかと考えられた。

賛助奉仕団設立当初に、全賛助会員に向け、改めて賛助奉仕団への入団の意思確認を求めるとともに、各人の持つ趣味・特技等を生かして、何がVS活動として提供できるかについてもアンケート調査を実施した。殆どの賛助会

員から寄せられた回答の結果、VSの数が29種類もの多岐に及んだ。

東京都支部の事業計画、青少年赤十字教育研究協議会の計画等から考えられるニーズによって、当面7種のVS(1)筆耕(毛筆)VS、(2)「糸杉」育苗VS、(3)資料作成VS、(4)ワープロVS、(5)篆刻VS、(6)マジックVS、(7)実技VS、に集約・分類し、理事会での承認を得て活動を進めることにした。

支部からの依頼による加盟校児童・生徒の青少年赤十字活動に対するメンバー表彰の、100人を超す賞状毛筆筆耕、パソコンによる加盟登録校名簿台帳の整理のほか、篆刻、マジック、三角巾法や結索法、救急法の技術の訓練・習得等、順調な活動が進められていった。登録式、福祉体験学習、赤十字に関する出前授業など、依頼に応えた数多くの学校訪問の機会も得た。



幼稚園登録式

海外派遣事業でモンゴル国を訪れた生徒たちが、猛烈な寒波による雪害の被害に苦しむ子ども達の状況を目の当たりにした体験から、救援事業として、都内加盟校に呼びかけ、衣料品を集めた。膨大な量の救援衣料を整理・梱包する高校生メンバーのVSにも協力した。

「糸杉」育苗VSは、育苗地の確保が課題であったが、幸いにも武蔵野赤十字病院施設管理課のご配慮で、院庭の一角を借用することができた。2001年(平成13年)8月、訪日中のラオス、モンゴル国のJRCメンバーと、病院に隣接する赤十字子供の家の庭に糸杉を記念植樹し、図らずも国際親善への協力となった。病院の育苗場は、2016年(平成28年)病院の一部建て替えのため、残念ながら16年間の幕を閉じ、返却となった。以後はVS部員個々の自宅育苗に頼って、現在に至っている。

東京都青少年赤十字研究協議会から、新しい学習指導要領に準拠した青少年赤十字活動推進のための資料がほ

しいと声もたらされた。東京都支部からの委託を受け、早速5人の団員が中心となって、リーフレット「青少年赤十字活動のすすめ」(幼・小版)(中・高版)の作成にかかった。2000年(平成12年)6月に完成、配布を始めた。10月には早くも増刷に入ったほどで、全国賛助会でも披露され大好評であった。

2001年(平成13年)総会でVSの再編。本社の依頼で、本社内ボランティアが発足。マジックVSを実技VSに吸収、新たに学校支援VS、支部支援VS、本社支援VSの3部を新設、合計9VS部で奉仕活動が推進されることとなった。具体的な活動が、全国に先駆けて整備され、各都道府県で模索されている奉仕活動の指針として期待された。

支部からの要請による個人ボランティア制度の確立が進み、VS活動の内容や種類の見直しをすることになった。

2007年(平成19年)、VS検討委員会が設けられ、検討。理事会で6VS部、(1)本社・支部支援VS、(2)加盟推進VS、(3)学校支援VS、(4)資料開発VS、(5)地区連携VS、(6)糸杉育成VSが決定・承認された。

2010年(平成22年)より良い活動を目指すために、VS部の組織と活動の一部を更に改正した。青少年赤十字との直接の関わりが不明確であった4つの活動を、「社会参加活動」として位置づけた。

・JRC普及活動…(1)支部支援VS、(2)加盟推進・地区連携VS、(3)学習支援VS、(4)資料開発VS、(5)糸杉・環境VS・社会参加活動…

(1)本社支援VS、(2)上野動物園VS(迷子相談・美化)、(3)赤十字子供の家VS(樹木剪定等)、(4)その他(にこにこ健康教室など)



上野動物園美化

それぞれのVS部

で、年間計画による活動が定着していった。2014年(平成26年)赤十字子供の家VS活動がなくなり、2016年(平成28年)上野動物園迷子相談から運営形態変更のため撤退、2018年(平成30年)資料開発と学習支援を1つのVSに統合。にこにこ健康法からも撤退。2019年(令和元年)には、都合で、糸杉・上野動物園美化VS部を発足させた。現行ではJRC普及活動に4VS部、社会参加活動に本社支援の1VS部という形で活動。

新型コロナウイルス禍のため、2020年(令和2年)以降すべての活動を自粛、中止している。

特別委員会

賛助奉仕団には、賛助会当時から3つの特別委員会が常設され、団活動の中心として活発に運営されている。

1. 広報委員会

賛助会発足当時から、長い間会報が発行されていなかった。1995年(平成7年)の、賛助会結成20周年記念誌の発行を機に、所属感を深め、会員としての自覚を高めるために会報が必要と9月に会報委員会が組織された。1996年(平成8年)12月10日賛助会報「とうきょう」創刊号が、賛助会発足23年目によりややく発刊となった。



広報「とうきょう」

2002年(平成14年)から「会報」を「広報」に改め、委員会も広報委員会に改称。特色ある内容を心がけ、研修旅行記、東京の赤十字史跡、シリーズ人物史「東京のJRCを支えた人々」、シリーズ「加盟校は今」、防災について、東日本大震災関連などを重点記事とした。

広報は、毎年の活動の記録でもある。全団員に送付し、団の現状の周知、団員としての自覚を高め、所属感を深めると同時に、全国賛助奉仕団、同協議会総会、日赤本社、赤十字都道府県支部、東京都支部委員会青少年部会等、関係諸機関に配布し、団の活動に広く理解を得ようとするものである。毎年6〜7回の会議をしているが、2020年(令和2年)からは、新型コロナウイルス禍の中、感染防止対策を万全にし、編集作業を進めた。

2. 研修委員会

賛助会が結成されて7年後、主な活動の1つとして、親睦



研修旅行 鹿児島

研修旅行が続けられてきた。

2001年(平成13年)から旅行委員会の名称を研修委員会に改め、親睦旅行に終わることなく、研修を怠らず、信念を持って奉仕団活動ができ、赤十字思想が一層深められるような、立案をしている。全国各地に残る赤十字ゆかりの地を訪れ、当地の賛助奉仕団との交流会を実施することは、意見交換をし相互理解と親睦を図る有意義なものとなっている。VSで育てた糸杉の苗木を贈呈し、喜ばれている。

1999年(平成11年)から、国内の17道府県を訪問し、合計25回に及ぶ交流会の実を上げてきた。2007年(平成19年)には、イタリア、スイスにあるアンリー・デュナンの遺跡と赤十字ゆかりの地を巡る旅も実施、深い感銘を受ける旅となった。

2015年(平成27年)から、新たに年度内に3回ずつの団員研修会を実施。赤十字に関連する事業、関東甲信越ブロック血液センター、総合福祉センター「レクロス広尾」、千葉県支部義肢製作所などの施設見学、都支部の事務局次長、事業部長、企画課長などの幹部職員の方々に講師に、「赤十字の災害対策」、「赤十字と国際人道法」などの講演や「救急法短期講習」の受講などで研鑽を重ねている。学校現場とのより良い信頼関係を築くために、「学校訪問の心得」の研修も深めている。



救急法短期講習

3・役員選考委員会

団員の中から、小・中・高の校種別に各2名ずつが互選され、規約により委員長1名、副委員長3名、会計2名、庶務3名の候補者原案を委員会で選定。総会にかけ、採決する。理事若干名と会計監査2名は、委員長が選任・委嘱。

青少年赤十字活動活性化推進委員

賛助会当時から加盟推進員制度が存在し、支部の委嘱を受けた10人が活動していた。1999年(平成11年)には、年間で延べ1,200回を超す学校訪問で、加盟校の現状把握と新規加盟校の増強に努めてきた。2002年(平成14年)から青少年赤十字指導講師に制度が改められ、加盟校への活動活性化支援の任務を継続していたが、2013年(平成25年)、青少年赤十字事業の普及促進を図るため、新たに青少年赤十字活動支援員の制度が設置された。加盟校活動の

活性化と加盟推進など従来と変わらないようではあるが、学校ニーズの把握、青少年赤十字指導者の確保や育成など、支部が抱える課題解決のためのヒントを得るなど、重要な任務を担うことにもなった。支部事務局長の委嘱を受けた10人の賛助奉仕団員が任に着いた。同時に「学校訪問の手引」の作成も委嘱された。

2年間の活動を踏まえて、2015年(平成27年)、名称も新たに青少年赤十字活動活性化推進委員となった。10人であった支援員の他に、指定の研修を受けた団員が、新たに推進委員として増員されることになった。青少年赤十字防災教育教材「まもるいのち ひろめるぼうさい」が本社によって作成され、全国の小中高校に公立・私立の区別なく無償で配布された。今後、防災教育が青少年赤十字事業の中核となることが見込まれ、活動活性化推進委員が、学校現場指導者への普及・研修に協力する役割も担うことになるかと、教材研究も怠りなく進めている。

コッハー女史の講演

賛助奉仕団の事業の中で特筆しておきたいのが、2003年(平成15年)に実施した特別講演会である。スイス赤十字親善使節として招へいたハイデンのアンリー・デュナン博物館運営顧問であり著名なアンリー・デュナン研究者であるエーテル・コッハー女史に講演をお願いした。会場は東京都支部大会議室で、5月19日に実施された。演題は「アンリー・デュナンの生涯〜頑固なまでの中立〜」で、女史の著作の内容を中心に、自作のスライドを使いながら、デュナンの知られざる一面、興味深い新知見などを、約1時間にわたり、熱く丁寧に語られた。

内容は、デュナン博物館、青年期のデュナン、ソルフェリーノの戦い、赤十字の創設、国外での生活、国際万国図書館、国際仲裁法廷、人間の真の敵、晩年の生活、世界の女性の同盟、最後の日記、赤十字の中立というものであった。



コッハー女史の講演



仲間と一緒に
たくさんの事を
学ぶ場所

私の
ライフワーク

色々な人を
助けられる
場所

人々の力に
なる赤十字

みんなの役に立つ
喜びを感じる
場所

成長
できる場所

人のために
やくだつ存在

みんなを守る
赤十字

優しい心

子どもとの
協働活動

人のために
活動する。

地域の役に
立てる赤十字

笑顔の
交わる場所

人との交流を
通じた成長の場

私がいま
ここにいる
理由

人を助ける
仕事

人のために
行動できる場所

世界の人々と
つながることができる
場所

みんなを
なぐさめる場所

自分成長
するJRC

学校と地域
をつなぐ

人の役に
立てる場所

人のやく
ににたつ
委員会

見境もなく
人を助ける

世界のことを
学べる場所

行動力を
起こせる場所

たくさんの事を
大切な仲間と
学ぶ場所

みんなを
助ける赤十字

困っている人の
役に立てる

自分を
大きく
するところ

一期一会

私と JRC

熱意でつながっていく JRCの^{たすき}樗

東京都青少年赤十字賛助奉仕団 小川 忠彦 先生

プロフィール

おがわ たひこ。昭和36年から36年間、中学校の教員として勤め、青少年赤十字活動の指導者として活躍。退職後、東京都支部の嘱託を経て、東京都青少年赤十字賛助奉仕団委員長、全国青少年赤十字賛助奉仕団協議会会長、顧問を務め、現在も賛助奉仕団員としてトレセンスタッフや学校での講演等、活動を継続している。

例年であれば宿泊で行っていたリーダーシップ・トレーニング・センター（以下トレセン）。令和3年度はコロナの影響を受けオンラインで「リーダーシップ・チャレンジ」と名前を変え実施しました。参加者に配信するため5名の先生方が東京都支部に集まり、その直後にこのインタビューは行われました。

戦後間もない中学生の頃にJRCと出会い、その後教職に就いてからは、教員とJRCの活動に全力を傾けてこられた小川先生と、トレセンで小川先生の指導を受け樗を受け取り、現在活躍されている4名の先生。これまでの活動を振り返りつつ、後進の方々に受け継いでいきたい「心の教育」についてお話を聞きました。



Junior Red Cross
With Me!

最初のきっかけは中学1年の担任の先生

私の育った広島県は、終戦直後の当時からJRC活動が非常に活発な土地でした。昭和23、24年頃のことです。当時、中学1年の担任の先生が研修に行って学んできたJRCにまつわるいろいろな話を熱心にしてくれて、青少年赤十字の歌「空は世界へ」もその先生から教えてもらいました。話の内容はほとんど覚えていませんが、歌だけは印象に残っていました。

教員生活の第一歩から

教員になって最初の赴任校が荒川区立第一中学校でした。当時の校長先生が非常にJRC推進に熱心で、JRCというのは生徒の人間育成に非常に効果のあるものなので是非広めていきたいという気持ちをもっておられました。登録式で「空は世界へ」が歌われたので「この歌、知ってるわい。」と言ったら、校長先生から「なんで知っているんだ？」と。広島での中学時代の体験を話したら即、「おまえも青少年赤十字の補導員になれ。」と言われました。補導員というのは、現在の指導員のことです。それからずっと、教員生活の間関わらせていただきました。

荒川区内にJRC活動を広げる目的で、研究協議会を立ち上げたのもその校長先生でした。他にも南千住中学校や第九中学校など、周囲には熱心な先生方が多く、特に若手の先生方は非常に精力的でしたので、彼らに刺激されて活動を続けてこられた部分もあります。そんな環境の中で、私のJRCとの関係は始まりました。荒川区は都内でもJRC推進に一番熱心な区だったと思います。

先ほどの校長先生はもちろんですが、特に担当教科が同じ理科だった先生とは、それ以来長い付き合いが続くことになりました。

伸びゆくJRC活動

昭和37年に荒川区の教員によるJRCを研究するための協議会が発足しました。そのころから生徒数そして加盟校数が伸びて、活動は活発になっていきました。日本赤十字社東京都支部には多くの部会があり、小学校部会、中学校部会、高等学校部会、そして各部会にも細かい分科会がたくさんあって、それぞれテーマを見つけては研究・活動していました。また、当時は支部のさまざまなお手伝いをさせていただくことで、そのための勉強もずいぶんしました。

JRC活動と教員生活を振り返って

本当に私は教員生活を楽しませていただきました。いろいろなことにこだわる性格ではありませんし、ご覧のとおり人間です。やはり先輩の先生方にいろいろ教えを受けながら活動を続けてきたことが、非常に楽しかったばかりでなく勉強にもなりましたし、これらの経験が自分の人間形成の糧になったことは間違いないと思います。赤十字の心を知れば知るほど、やはり子どもたちに対する気持ちが大事になってくるわけです。赤十字にこだわることはないと思いますが、やはり赤十字の気持ちが沁みとおっていけば素晴らしいと思うと思っています。



思い出の「空は世界へ」をバックに赤十字について伝える（令和元年度トレセン）



小川先生のお話を熱心に聞く生徒たち(令和元年度トレセン)

大切にしてきたこと

活動の軸としてあったのは、「人間を体現する」ということでしょうか。それが一番だと思っています。子どもたちに対して、いじめや差別をしてはいけないと伝えること、このことはいつも頭にこびりついていましたし、何かあったときにはすぐに対処する、これも大事だと思っています。ただそういったことを、子どもを大事にするんだ、心を大事にするんだ、命を大事にするんだということを、一人一人の先生方がしっかりと心の中心において日常を過ごしていただければ、自ずとその姿勢が子どもたちに伝わっていると思いますし、そのような教師が一人でも多くなることが私の望みです。



小川先生を囲んで

これからの指導者に伝えたいこと

さっきも申し上げましたが、子どもを大事にするということが絶対なんです。私も30数年間教員生活を、さまざまな学校でさまざまな生徒と送ってきました。ひとつ例を挙げますと、ある年のトレセンに参加した子の中に、少し荒れているような子どもがいたんです。だけど3泊4日いろいろとやって過ごして帰宅すると、子どもがすっかり変わったんだそうです。その子のお母さんが学校に来て「トレセンから戻ってから子どもがすっかり変わってしまって、先生、トレセンでどんな魔法をかけてくれたんですか？」って言ったことがあるんです。

その訳は、どんな子どもにもじっくりと話を聞いてあげることです。子どもの話にじっくり耳を傾けて、何をしたいのか、何をしたいのかを理解してあげれば、その子どもは絶対大丈夫なんです。そのような姿勢が赤十字の心で、私がこれまで大切にしてきたことです。

青少年赤十字100周年というのはすばらしいことですし、子どもたちに心の教育を続けていくというこの活動は途切れさせてはいけない。これからも多くの人がしっかりした理解でもって広げていってほしいですね。

小川先生との関わり

郷原先生 小川先生が教頭を務めていた学校に勤務していました。当時の教育新聞だったでしょうか。教員トレセンの募集があって、参加したいと小川先生に相談したら「うん、いいんじゃない。行っておいで。」ってすぐに許可してくれて、行ってみたら目から鱗が落ちるほどの衝撃を受けました。それまでやってきていた生活指導の方法とは全く違う角度からの、こんな指導法があるんだって感激して小川先生に話したら、そこで初めて先生が長いことJRCに関わられてきたことを話してくれたんです。それがきっかけになって次の年からはスタッフとして関わらせていただいて、毎



郷原先生



白土先生



小林先生



池田先生

年参加する度にいろいろなことを吸収させていただくうちに30数年が経ちました。

白土先生 私がJRCのトレセンに携わり始めたのは4年前です。現在はコロナの関係でzoomでのリーダーシップ・チャレンジという形ですが当時は宿泊行事で、最初に教員向けの研修に参加させていただいたとき、赤十字概論の講義をされていたのが小川先生です。次年度からはスタッフとして参加していますが、毎年小川先生の講義では、人生を語られながら赤十字とのふれあいや戦争体験等、さまざまな話を聞かせていただいています。特に戦争の話は私自身経験したことがないにもかかわらず非常に胸に迫るものがあり、毎回子どもたちよりも心に沁みていると思います。

小林先生 前任校の谷中中学校で生徒会を担当していたとき、郷原先生にトレセンを勧めてもらって参加したのがJRCと関わり始めたきっかけです。初年度は研修、次年度からはスタッフとして参加して今年で8年目となります。谷中中学校生徒会ではJRCを軸とした活動を行っていて、全校にJRC活動を伝えていくという取り組みの中で小川先生にも来ていただき、赤十字の思いや赤十字ってこういうものなんだということをいろいろ話していただきました。いつもはプログラム準備のために体を動かしながら何う講義を今日はオンラインということでじっくり拝聴できて、すごく

贅沢な時間を過ごさせていただきました。

池田先生 私が最初に赴任したのは荒川区立尾久八幡中学校で、JRC活動が非常に盛んな学校でした。当時中心的立場で活動されていた先輩の後任として私が入ったので先輩の任を一気に引き継ぐ形となり、JRCとはそのときからの関わりです。小川先生は当時尾竹橋中学校の教頭をされていたので別の学校だったのですが、荒川区の教員研修会でしばしばお会いする機会があり、そのお人柄やお話に大変感銘を受けました。その後小川先生が尾久八幡中学校の校長として赴任してこられ、直々にご指導いただくことになり、JRCや教員としてのイロハのイから教えていただきました。

私も郷原先生と同じく、教員スタート時点からJRCに関わっているので、既に30年以上になります。毎年のようにトレセンに参加していましたし、荒川区独自のトレセンというものもありました。荒川区には7年間在籍していたのですが、夏休みは宿泊行事続きでほとんど休めませんでした。トレセンでは一日の終わりに必ず反省会を開くのですが、そこで小川先生をはじめとする先輩方から薫陶を受け、筋の通った大事にしなければいけないことを叩き込まれていくうちに、次第にそれが楽しみへと変わっていきました。人とのつながりがあり、支部の方々との関わりがあり、小川先生を頼りにしながら今までこられたという感じです。ありがとうございます。



小川先生の想いを受け継ぎトレセンのセンター長をつとめる郷原先生

私とJRC

JRC活動を続けることで、未来に役立つことがある

一橋大学准教授 竹村 仁美 先生



一橋大学准教授の竹村仁美先生はJRC加盟校の大森第十中学校の卒業生で中学時代にJRC部でボランティア活動を経験され、都支部の海外研修派遣事業で平成4年(1992年)にオーストラリアを訪問しています。大学ご卒業後は、ルワンダ虐殺において国際人道法の重大な違反について責任を有する個人を訴追・処罰するためにオランダのハーグに設置されたルワンダ国際刑事裁判所において、平成16年(2004年)にインターンを経験されるなど、国際的な活動に携わり、国際刑事法をご専門とされています。

また、赤十字国際委員会(ICRC)駐日代表部が主催する国際人道法模擬裁判において、裁判官役を務めるなど現在も赤十字活動に多大なご協力をいただいています。JRCは人道教育の一環として国際人道法の普及にも取り組んでいます。竹村先生のJRCでの経験が現在のご活躍にどのような影響を与えたのかについて伺いました。



竹村先生と学部ゼミ生授業風景

中学時代にJRC部に入ろうと思ったきっかけについて教えてください。

社会科の教師として新しく赴任されてきた先生がJRC部を作りたいとのことだったので、仲の良かったハンガリー人と日本人の友人と私の3人でJRC部に入りました。当時のJRC部の活動は、中学校周辺の清掃活動や老人ホームの慰問などでした。清掃しているとご近所の方々からお褒めいただいたり、老人ホームではお年寄りの話し相手をしたりしていました。JRC部での活動のおかげで通常の学校生活だけでは出会うことのできない多くの方々との触れ合いを経験できました。

JRCの海外研修派遣事業でオーストラリアに行かれたと伺いました。その際のエピソードなどがあれば、お聞かせください。

JRC活動の中では、オーストラリアでの海外研修が大きな思い出となっています。海外研修への応募を勧めてくれたのもJRC部顧問の先生でした。「こういう研修があるんだけど、興味があったら応募してね」と言われて申し込みました。まず書類選考があって、そのあと面接がありました。準備のために赤十字に関する本をたくさん読んで勉強しました。その成果でしょうか、選考を通過して海外研修に参加することができました。

海外研修派遣メンバーは私たち中学生と高校生、あと引率の先生と赤十字の方の総勢20名でした。派遣期間は夏休み中の9日間で、首都キャンベラやメルボルンなどを訪問しました。

研修の前半はオーストラリア赤十字社の方の案内で、オーストラリア赤十字社、国会議事堂などを訪問

しました。現地の小学校の青少年赤十字メンバーやオーストラリア赤十字社のユースボランティアとの交流会もありました。その中で最も印象的だった出来事は、国会議事堂でロス・ケリー環境大臣と面会させていただいたことです。女性が国会議員で、しかも大臣だったことに新鮮な驚きを感じました。

研修の後半はメンバーが数名ごとに分かれてホームステイし、現地の生活を体験しました。その中で最も忘れられない出来事は、落馬して脳震とうを起こしてしまったことです。ホームステイ先のご厚意で森の中を乗馬したのですが、4名くらいで列を作って進んでいるとき私の馬だけが急に草を食べたくなって走り出し、落馬してしまいました。実は小学生のころ多少の乗馬経験はあったのですが、その程度の乗馬経験では制御できないほどの勢いでした。大事には至りませんでした。頭を打っていましたので、後遺症が出たら大変だと両親が心配して、帰国してから大学病院で念のため精密検査を受けました。

その他、ホームステイ先一帯が停電になったことがありました。その停電の最中に冷たい水のシャワーを浴びて風邪をひき、帰りの機内で高熱が出てしまった子がいまいました。初めての海外旅行で慣れない環境だったのでトラブルもありましたが、今ではいい思い出になっています。

国際刑事法をご専門とされていますが、中学時代にJRCの海外研修派遣でオーストラリアに行かれたことが国際的なことに興味を持たれるきっかけとなったのでしょうか。

中学時代にオーストラリアに行ったことが国際的なことに興味を持つきっかけとなったと思います。短



出発時、成田空港



キャンベラの国会議事堂、大臣執務室



シドニー、オペラハウスの対岸

い期間ではありましたが、海外でいろいろな人とつながる楽しさを知ることができました。都立国際高校に進学したのも、「国際」という言葉に魅力を感じたからです。オーストラリアでの体験は他の参加者にとっても刺激になったようで、一緒に行った仲間2名も同じ高校を受験していました。

高校1年生のとき中学時代のハンガリーの友人に1人でハンガリーまで会いに行けたのもオーストラリアでの海外研修を経験していたからだと思います。この友人は、中学のときJRCで一緒に活動していた親友でした。両親の仕事の都合で中学卒業前に帰国してしまったので、どうしても会いたくて安いチケットを入手しました。そのときは彼女も帰国してまだ日が浅かったので日本語でのコミュニケーションは問題なかったのですが、大学時代に再度訪ねたときにはほとんど日本語を覚えていなかったのが少し残念でした。そのときは片言の日本語で意思疎通しました。

法律に興味を持たれたきっかけは何だったのでしょうか。

親戚に裁判官がいたことが法律に興味を持ったきっかけです。大学は私立大学の法学部に行きたかったのですが、東京外国語大学に入学することになりました。3年生進級時のゼミ選択の際、法律関係は民法と国際法の2つしかなく、「国際」という言葉に魅力を感じて国際法のゼミを選びました。

ゼミの担当教授は国際人権法がご専門でしたが、私は国際刑事法に興味を持つようになり、オランダにある国際刑事裁判所のことを中心に研究を続けています。

海外留学でも多くのことを学びました。国際刑事裁判所では、国際人道法の重大な違反が裁かれるケースが多いため、国際刑事法と国際人道法は間接的に繋がっています。オランダは国際刑事法の本場なので、ライデン大学大学院で国際刑事法を勉強し、国際人道法についても学びました。また、オランダのハーグに設置されたルワンダ国際刑事裁判所でインターンを経験しました。

アイルランド国立大学ゴールウェイ校付属人権センター博士課程では、国際刑事法を中心に勉強しましたが、その下地となる知識として国際人道法が重要でした。ジェノサイド(ナチス政権によるホロコーストをきっかけに定められた民族を根絶やしにする犯罪)研究の第一人者がいたことがアイルランド国立大学を留学先として選んだ理由でした。

現在も赤十字との繋がりと伺っています。そのあたりのことをお聞かせください。

現在、私と赤十字の繋がりとえば、赤十字国際委員会駐日代表部主催で行っている国際刑事裁判所模擬裁判の裁判官役です。この催しは毎年行われる大学対抗の競技大会で、学生たちがそれぞれ検事側と弁護団側に分かれて架空の国際刑事事件を裁くもので、この大会に優勝すると海外で行う国際大会に出場できます。

一橋大学にも出場のお誘いがあったので教え子たちが挑戦しましたが、かなりの英語力が必要でし、学生たちも就職活動や司法試験準備等で十分な予習ができなかったため大敗してしまいました。他大学の学生たちのように1年生の時から自主的な勉強会をしていれば良かったのですが、一橋大学の学生には、そこまでの熱量がなかったのも、それ以降はボランティアとして私が裁判官役を務めています。

中学時代の海外研修以来、途切れ途切れではありますが赤十字との繋がりは続いています。国際刑事裁判所模擬裁判での裁判官役もそうですが、阪神淡路大震災のときには父親と高校の友人と3人で義援金の宛名書きボランティアに参加するため日本赤十字社本社に行った覚えがあります。大学のときには、日本赤十字社東京都支部で開催された国際交流同窓会のパーティに友人と一緒に参加させていただき、楽しかったのを覚えています。

海外研修を引率していただいた宮崎さん(現 都支部事務局次長)とは、年賀状のやりとりを続けていたので、そのような情報を教えていただくことができました。

また、大学でお世話になっていたゼミの先輩が日本

赤十字社に就職していたり、模擬裁判を主催している赤十字国際委員会駐日代表部の担当者がゼミの後輩だったりしたので意気投合したことがあります。そのような時は、自分も赤十字にかかわってきて良かったなと思います。

現在JRC活動をしているメンバーへのメッセージがあれば、お聞かせください。

JRCでのボランティア活動は、人のために行っていると思いますが、結果として自分のためにもなることがあります。のちのち起きるさまざまな出来事に、私のように赤十字が深くかかわってくるかもしれません。現在は助ける側にいても災害などによって突然助けられる側の人になるかもしれません。だから余力があるときは、ボランティア活動にかかわってもらいたいと思います。

赤十字活動をすることによって、国際的視野をもつことも大切だと思います。日本にいと現在の生活で十分だと感じてしまうかもしれませんが、些細なことにも国際法が関係していて、これまで当たり前だと思っていた日本国内の基準だけでは世界に通用しない場合もあります。国際的視野をもつことによって、日本の暮らしが今以上によくなる可能性があります。

日本について考える際に、その前提とな

る世界のことを知ってほしいと思います。海外を経験して初めてわかる日本の良さもありますので、機会があれば国際的なことにかかわってほしいですね。

JRC活動を続けることによっていいことがあるかどうか、それは人それぞれです。何とも言えません。私は親しい友だちと一緒にいたくてJRC活動を始めたのですが、その活動をきっかけとして国際的なことに目を向けるようになり、現在の職業に就いています。

派手な活動でなくても今やるべきことを地道に続けていれば、私のように運がひらけることがあります。現在のJRC活動が将来なんの役に立つのか、それは誰にもわかりませんが、活動を続けることで、のちのち自分に返ってくることがあるはずです。ぜひJRC活動を続けてください。



竹村先生と学部ゼミ生集合写真

竹村仁美先生 略歴

●学歴

- 2001.3 東京外国語大学外国語学部欧米第一課程ドイツ語学科卒業
- 2001.4 一橋大学大学院法学研究科修士課程入学(国際公法専攻)
- 2003.3 一橋大学大学院法学研究科修士課程修了
- 2003.4 一橋大学大学院法学研究科修士課程入学
- 2003.10 オランダ・ライデン大学大学院法学研究科修士課程入学
- 2004.9 オランダ・ライデン大学大学院法学研究科修士課程修了
- 2005.9 アイルランド国立大学ゴールウェイ校付属人権センター博士課程入学
- 2008.3 一橋大学大学院法学研究科博士課程中退
- 2008.6 アイルランド国立大学ゴールウェイ校付属人権センター博士課程修了

●インターンシップ

ルワンダ国際刑事法廷上訴裁判部インターン(2004.7-2004.12);国際刑事裁判所検察局法務部(Legal Advisory Section)クラーク(2005.3-2005.8)

●職歴

九州国際大学法学部助教(2008年)、同准教授(2009年4月~2012年9月)、愛知県立大学外国語学部国際関係学科准教授(2012年10月~2016年3月)、一橋大学大学院法学研究科准教授(2016年4月~)現在に至る

私とJRC

JRC部員の今、そしてこれから 下北沢成徳高等学校 JRC部

メンバー：JRC部員18名
(3年生5名、2年生5名、1年生8名)

顧問：渋谷 浩 先生

1971年青少年赤十字に加盟し、今年で50年目を迎える下北沢成徳高等学校JRC部のみなさんに、その活動について、コロナ禍での変化、これからの展望等についてお話していただきました。

JRC部に入部したきっかけを教えてください。

巖本さん 元々ボランティアに興味があったので入部しました。

藤平さん 中学校のときボランティアをしていて楽しかったので、高校でも続けたいと思ったからです。

澁谷さん 小中学校でボランティアをしてきましたので、高校でも続けたいと思って入りました。

市川さん 将来の夢は看護師なので、何か人のためになることをしたいと思って入りました。

片柳さん 私も小学校からボランティア活動を続けていて、高校でもやりたいと思ったからです。

瀬賀さん もともととは中学校以外の場所でボラン

ティア活動をしていました。高校でもできたら素敵だなと思って入りました。

秋山さん 学校周辺の清掃活動に参加したことで、校内のボランティアにも興味を持ったからです。

内藤さん もともと人のために何かすることが好きなので入部しました。

矢本さん 普段からボランティアをしたいと思っていましたがなかなかその機会がありませんでした。JRC部の存在を知ったので、入部をきっかけにボランティアを始めたいと思いました。

南場さん 高校受験のときにボランティアをしたことがあって、そのとき自分の知らないところで動いてくれている人の存在を知ったり、海岸の清掃に参加したときにその汚さに驚き、少しでも自分にできることがあれば始めたいと思ったからです。

JRC部の活動内容を教えてください。



令和元年の活動

主に学校周辺の下北沢商店街の清掃活動などを行っています。だいたい放課後30分位です。また、都支部の青少年赤十字のプログラムにも積極的に参加するようにしています。

活動を通して気が付いたことはありますか？



令和元年の活動

巖本さん 部活動としては、主に学校周辺の下北沢商店街の清掃活動などを行っています。だいたい放課後30分位です。また、都支部の青少年赤十字のプログラムにも積極的に参加するようにしています。

藤平さん この頃はコロナ禍であり活動はできていませんが、それでも自分たちでできることを考えて活動しています。

南場さん 下北沢は自分たちと同じくらいの年代が遊びにくる街なので、清掃活動しているとタピオカドリンクの空カップがとても目につきました。コロナ禍ということもありますが今はゴミ



トレセン指導スタッフとしても活動されている渋谷先生

箱が減っているので、数少ないゴミ箱として自動販売機横にある空き缶・空きペットボトル入れにあふれるほどゴミが詰まっていた、ゴミ箱にも容量があること、その容量を超えてまで捨てていい場所ではないことに気づかされました。

内藤さん 商店街の清掃活動をしていたとき、あちこちでお酒の空き容器がまとめて捨ててあるのを見つ



けて、友達と「あまりいい気持ちはしないね。」って話していました。私たちがそれらを片付けることで少しでも多くの人が嫌な気持ちにならないですむなら、これからも清掃活動を続けたいと思いました。

1年生は入部して約半年ですが、印象に残った活動はありますか？

片柳さん ワーチャレ※1(ワークショップxチャレンジ)が一番印象に残ってます。これは自分たちでボランティアの企画、活動、ふりかえりまでを行うもので、今年はコロナ禍なので主な活動はオンラインで行っています。今回私が企画したのは子ども食堂でボランティアをするというもので、子ども食堂って名前は知られているけど、実際はどこでやっているのか、どのような内容なのか調べ、実際にお手伝いに行く企画でした。



瀬賀さん 私もワーチャレが印象深



いです。リモートで他の学校の人と交流したときは、すごく緊張しました。



片柳さん 私はワーチャレで内藤さんと一緒に子ども食堂のお手伝いに行きました。最初は高校生が行って迷惑にならないか心配でしたが、スタッフの方がひとつひとつ丁寧な説明してくれて、机や食事を並べたり、持って帰る人にすぐ渡せるようにお弁当を準備しました。来てくれた子どもたちにも笑顔で接することができたので、とても大変でしたが達成感を得ることができました。

澁谷さん 私も一緒に子ども食堂の活動に参加しました。スタッフの大人たちがとってもフレンドリーで、高校生の私たちを子ども扱いすることなく対等に接してくれて、私もこういう大人になりたいと強く思いました。

秋山さん 私はワーチャレで、赤十字の歴史などをオンラインで学習することができてとてもよかったと思います。



2、3年生にお聞きします。これまでの活動で印象に残っていることを教えてください。

矢本さん 熊本集中豪雨のときに、赤十字に提供してもらった材料で非常用トイレを作りました。ゴミ袋にティッシュのようなものを入れて梱包するだけの単純作業なので、初めは30分もあればできると思っていたのですが、予想以上に大変な作業でした。でも、実際に被害に遭われた方の役に立つなら頑張ろうという気持ちになりました。

藤平さん 私も一緒にやりました。みんなで500セット作ったのですが、部員がたく

さんいるわけではないのでとても大変でした。

巖本さん 学校外で行った献血ボランティアです。都内の献血ルームで献血してくださった方のご案内とか、献血ルームのスタッフのお手伝いとかしました。活動をしていると、献血をしてくださった方が「ありがとう」と声を掛けてくれたり、献血ルームの外で広報活動をしていると「暑いから気を付けてね」といった励ましの声をいただいたりして、周囲のみなさまの



優しさを感じることができたのが印象的でした。

JRCの活動によって、自分が変わったと思える点がありますか？

南場さん 清掃活動や募金活動をするによって、街中のゴミが気になったり、街頭募金が目についたり、周囲の環境に対する感覚が鋭くなったような気がします。

矢本さん コロナ禍で活動が難航していますが、反対に地域やお店の方とオンラインで何かできることがあるんじゃないかと、考え方が豊かに積極的になりました。

藤平さん 東京都支部のJRCメンバー連絡協議会の活動では、役員を務めています。他校の役員と話し

合って綿密に企画を立てて実行に移していきます。そのような経験を積むことで企画力が養われました。現在はZoomで防災についての活動に取り組んでいますが、防災に対する事前準備への意識も変化しました。

コロナ禍が収まったらやりたい活動はありますか？

藤平さん 昨年のワーチャレの活動で、老人ホームの方にビデオレターを送らせていただいたんです。内容はコロナ禍で発表会が中止になってしまった日本舞踊や箏曲の活動を撮影したものなのですが、とても喜んでいただいたので、訪問できるようになったら実際にお会いしてお話をしたいと思います。

市川さん 清掃活動をもっとしたいです。学校周辺だけではなく、新宿や渋谷にも範囲を広げられたらと思います。

片柳さん コロナ禍が収まって訪日外国人が増えたとき、日本にきた人たちががっかりしないようなきれいな街にしたいと思います。

市川さん 他校と一緒に活動がしてみたいです。清掃活動や献血、簡単なことでもいいから協力してやりたいと思います。

矢本さん 昨年あしなが募金の活動をやったのですがコロナ禍だったので、校内で先生と生徒に向けてやりました。これを校外でもっと多くの人に対してやりたいと思います。よく街で募金活動を目にしますが、何の募金活動かわからないことが多いので、それを私たちみたいな年代が募金活動をすることで、同年代の



校内で行ったあしなが募金活動

人たちにも興味をもってもらえるんじゃないかと思っています。私たちの年代だからこそできることとして、募金活動をしたいです。

渋谷先生 あしなが募金は、今、街頭募金がで



きなくてかなりひっ迫しているんですが、長年募金活動に協力していますので、去年は校内でやらせてもらいました。

藤平さん コロナ禍での、オンラインのボランティアも悪い面ばかりではないと感じています。都支部のイベントでオンラインでルワンダの方々の話を1回聞いたことがあります。インターネットで調べるだけの情報と違って新鮮味があり、現地の状況をしっかりと伝えてくれたのでとても感動しました。そういう活動をもっとしていきたいと思います。

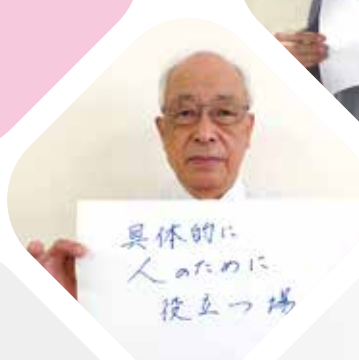
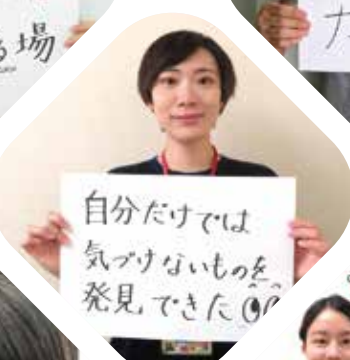
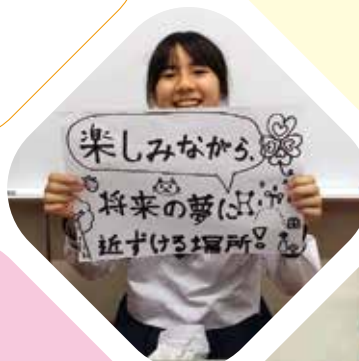
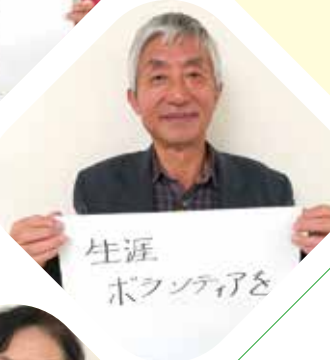
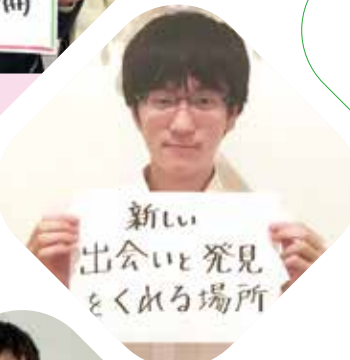
顧問としてのお考えをお聞かせください。

渋谷先生 基本的には生徒側が主体となって計画、活動をしています。清掃活動も今は新宿や渋谷までは行けませんが、学校周辺もまだすべてを網羅しているわけではありません。今までしてこなかった範囲の清掃を企画して実行に移すことはできますので、生徒たちの企画次第です。また、私は顧問として新しい方向に



興味を伸ばしてもらえるようにテーマを投げかけることはありますが、あくまでもJRCは生徒主体の活動です。これからも生徒ひとりひとりの興味を伸ばして活動を広げていってほしいと思っています。

※1 「ワークショップ」に1人1人が取り組むことで「気づき、考え、実行する」のサイクルを体験するオンラインJRCプログラム



上野動物園内の迷子相談活動

JRC活動-1 昔と今

昔

この活動は1952年(昭和27年)以来、東京学生奉仕団が園内の迷子の防止・発見・保護に当たってきた奉仕活動である。活動期間は毎年3月下旬から5月上旬までの休日・祝日であるが、高校生メンバーは1973年(昭和48年)から応援活動に入っている。1978年(昭和53年)からの10年間の迷子の取扱い数は7,104人であり、参加校は292校でメンバー数は5,969人を数えている。



昭和60年の様子



第36回 昭和62年

今

現在も、東京都恩賜上野動物公園からの依頼により、毎年春休み中の土日と祝日、ゴールデンウィーク期間中、JRC加盟校の高校生が迷子相談活動に取り組んでいる。高校生ボランティアのサポート役には、救護ボランティア、青年学生赤十字奉仕団が活躍。迷子札の配布と園内パトロール、迷子の受付と保護の活動を行っている。最近では、上野動物園の人気者、ジャイアントパンダの赤ちゃん(シャンシャン)を見るために大勢の人が集まり、迷子ボランティア活動も賑わいをみせている。コロナの緊急事態宣言中は活動中止になったが、双子のパンダの赤ちゃん(シャオシャオとレイレイ)が生まれ元気に育っているので、活動が再開されることを楽しみにしている。



優しく声をかける高校生メンバー



迷子になる前に迷子札を記入

メンバー連絡協議会

JRC活動-2 昔と今

昔

東京支部は1949年(昭和24年)4月、「青少年赤十字支部協議会」(団員協議会、または連絡協議会とも呼ばれる)を発足させた。これは、団員(生徒)の組織で、その目的は「東京支部に登録した青少年赤十字団相互間の連絡親睦向上を図る機関として活動する」ことにある。毎月、常設協議会が開かれ、役員の選挙や児童養護施設訪問、大会などの打ち合わせが行われるようになった。



昭和45年 東京都中学校JRC連絡協議会



平成16年中学生メンバー連絡協議会(東京都支部)

今

この組織は、現在「東京都青少年赤十字メンバー連絡協議会」として、年に6回、都内の中高校生メンバーの交流の場として、活動活性化の一助となっている。高校生メンバーから、立候補により選ばれた役員が企画・運営を担当し、「防災」や「献血」「ハンドケア」などテーマを決めて交流しながら学びを深めている。2020年度(令和2年度)からは、新型コロナウイルス感染症の感染防止のため、オンラインでも取り組んだり、青年学生赤十字奉仕団との交流の機会として「クロスプロジェクト」を開催したりと、ニーズに応じて内容を変えながら、学びの場として継続している。



集合時「ハンドケア」について学び、体験する回



オンライン開催の様子(令和2年度)

リーダーシップ・トレーニング・センター

昔

加盟校のメンバー対象に青少年リーダー養成を目的として、毎年夏休み中に宿泊訓練のトレーニング・センター(トレセン)を実施している。ここでは、赤十字・青少年赤十字の知識・理解を深めながら救急法など実技指導を受けている。参加修了者が、体験を通して、きわめて積極性を高め、教師・保護者から、子どもの生活態度が望ましいものにかわったとの報告を受けることが多かった。メンバーの資質向上にその成果を見ることができる。

トレセンの始まりは、昭和23年本社主催により「指導訓練所」の名称で、東・西日本に区分して開催されたのが最初である。

東京支部からも、箱根強羅の恵風館の会場に4名が参加した。

翌昭和24年7月には、支部主催で小・中・高の児童・生徒対象のトレセンが、御嶽山を会場に行われた。委員会を中心に自主的に活動し、小中高23人が参加した。

- ・昭和25年(川崎明治大学農学部)155人
 - ・昭和26年(小金井浴恩館)108人、
 - ・昭和27年(小金井浴恩館・長瀬林間ハウス)179人
 - ・昭和28年(長瀬養浩亭)209人
- と年々参加者が増えた。

毎年夏季休業期間に、小・中学校は3泊4日、高校は昭和31年度から4泊5日に延長して実施。1回の定員を50名程度としたが、参加希望者が多く高等学校は昭和28年度から2回以上、昭和38年からは、小・中学校とも2回実施となった。

昭和42年までの支部主催のトレセンは83回、参加団員数は約3,000名を越す。指導者の支部スタッフ(現役の教員)も熱心であった。



昭和26年 小金井浴恩館



昭和48年 長野県春日温泉

JRC活動-3 昔と今

妙義山



昭和50年 妙義山



トレセン会場を長瀬林間ハウス、箱根湯の花ホテル、小金井浴恩館、入間グリーンロッジ、エバーグリーン富士と変えながら、継続している。



入間グリーンロッジ



平成元年 入間グリーンロッジ 福祉体験



昭和60年 入間グリーンロッジ 救急法

リーダーシップ・トレーニング・センター

今

毎年夏休みとなる8月に小・中・高の3校種で、3泊4日のトレセンを実施。平成28年度から高尾の森わくわくビレッジに常宿を移し、東京都教育委員会等の後援をいただき、実施している。

ボランティア・サービス(V・S=奉仕活動)、先見、合図のない生活(5分前行動)、自主自律の心を育む、ホームルーム、フィールドワークに「赤十字」「福祉体験」「救急法」「防災学習」「炊き出し訓練」「国際理解」「キャンプファイヤー」などの学習プログラムを組み合わせ活動している。



フィールドワーク



救急法



福祉体験(車椅子体験)



キャンプファイヤー

JRC活動-3 昔と今

【オンラインでの取り組み】

新型コロナウイルス感染症の影響を受け、令和3年度の新たな取り組みとして、トレセンの代替行事を小中高の3校種ともにオンラインで実施。

小学生は、保護者を巻き込み「家族で！赤十字防災デー」と称し、非常用の携帯トイレ体験や、避難時の持出し品を考える災害時シミュレーションを実施。中学生は、コミュニケーションを通じてリーダーシップを身に着けることを目的に「リーダーシップ・チャレンジ」を実施。9校から28名の生徒が参加し、終了後には「自分の意見だけでなく相手の意見も尊重する、など人と関わる時に大切なことを学ぶことができました。」という感想が寄せられた。高校生は、令和2年度に初実施した「ワークショップ×チャレンジ」をレベルアップして実施。11校から44名の参加があり、赤十字やSDGsについて学び、他校のメンバーと交流をしながら「今自分にできるワークショップ」を考えた。3か月の実行期間を設け、成果を発表し合う成果発表会まで無事開催した。



小学生対象、家族で防災について考える「家族で！赤十字防災デー」



中学生対象「リーダーシップ・チャレンジ」画面越しではあるが、大切な思いは伝わる



高校生対象「ワークショップ×チャレンジ」では、それぞれ活動の様子を動画にまとめて発表し合った(子ども食堂でのボランティア活動についての発表動画)

クリーンキャンペーン(現クリーンプロジェクト)

昔

1973年(昭和48年)夏から東京放送が主催し、本社が協力したキープ・ジャパン・ビューティフル(観光地美化運動)に東京の団員も協力。小・中・高校生96名が高尾山で空き缶、ごみの清掃活動をした。翌年は、神代植物公園と高尾山で実施し、1975年(昭和50年)まで続いた。

キープ・ジャパン・ビューティフルは社会的にもメンバーにも好評となり、支部主催でもこの趣旨の行事が企画され、1977年(昭和52年)には、石神井公園で奉仕団とともに清掃奉仕にあたり、JRCと奉仕団の結びついた新しい分野に発展した。



昭和49年 クリーンキャンペーン 神代植物公園



昭和63年 多摩川でのクリーンキャンペーン



平成元年葛西臨海浜公園
「クリーン大作戦」としてテレビに取り上げられたことも



平成3年度クリーンキャンペーン 新宿中央公園にて

JRC活動-4 昔と今

今

現在も、取り組みやすい身近なJRC活動として、多くの園・学校が清掃活動を継続している。地域の奉仕団や町会・自治会と連携し地域清掃として継続しているところも多数ある。

2018年(平成30年)には、TOKYO2020オリンピック・パラリンピック競技大会応援プログラムとして、「赤十字クリーンプロジェクト」を実施、コロナのため統一行動は中止になったが、オリジナルビブスを着用して、多くのメンバーが活動に取り組んでいる。

多くの学校で自分たちの地域をきれいに



国際交流

JRC活動-5 昔と今

昔

～訪問または受入～

- ・昭和30年、オーストラリア青少年赤十字国際トレーニング・センターに高校生代表1人を派遣
- ・その後、アメリカ、インド、カナダ、フィリピン、ソビエト、メキシコなどへ数人を派遣
- ・昭和37年～10年間、復帰前の沖縄とメンバー交歓
- ・昭和45年、「こんにちはセブンティ」東南アジア汎太平洋地域青少年赤十字国際セミナーへ派遣

～ギフトボックス等を通じた交流～

- ・昭和2年、人形使節の交換、アメリカ、ベルギー、スイス、イタリア、オーストリア、チェコスロバキア、ブルガリア、カナダ、ルーマニアの10カ国の少年赤十字団に手作りの人形を贈り、交換した。
- ・昭和10年、少年赤十字国際放送、アメリカ赤十字社主催の少年赤十字の国際放送が実施された。日本、アメリカ、フランス、チェコスロバキア、カナダ、イギリスの6カ国が参加し、東京支部愛日少年赤十字団員が日本少年赤十字団員を代表して日本語で放送し、日本赤十字社長の徳川侯爵が英訳放送した。
- ・昭和14～15年、戦禍の中国学童生徒へ、学用品249,000点、手紙1,550通を送付
- ・青少年赤十字再建の昭和20年代前半の頃、米赤からギフトボックスの救援品を受けたことは既述のとおりであるが、物資不足に悩んでいたメンバーたちは大変喜んだと伝えられている。昭和53年、当時からの指導者の先生方からの呼びかけで、東南アジア・アフリカの発展途上国のメンバーへ文具類発送の計画が進められ、その2年後に実際活動に入った。高校生連絡協議会の下部組織として、ギフトボックス委員会を設置、加盟各校の協力を得て、10年間活動をしてきた。

平成14年度から東京・北京・ソウルの各国10名計30名の中高生のJRCメンバーを対象に毎年各支部輪番により三首都交流を開催。様々なプログラムを通して友情を育み、交流の輪を広げている。



東南アジアJRCとの交流(昭和61年)



東南アジア難民国際親善サッカー試合(昭和59年)

今

現在も引き続き、東京・北京・ソウルの三首都交流として、各国支部が輪番で、中高生JRCメンバーと指導者が訪問し合っている。令和2年・3年度はコロナのため中止。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、本社が主催する国際交流集会はオンラインとなり、アフガニスタンやバングラデシュをはじめとした17の国と地域の赤十字・赤新月社とその支部とリアルタイムで交流をすることができた。オンラインの「より多くのメンバーがより容易に参加できる」という特性を活かし、各都道府県支部からの参加者は236名、海外から参加した青少年メンバーは76名であった。

東京都支部からも、7名の高校生メンバーが参加し、「新型コロナウイルス感染症」という全世界で共通するテーマをもとに、各国でのコロナ禍を取り巻く現状と今自分たちにできることを話し合った。



三首都交流



受入の際は東京を案内



オンラインでの交流



各国のコロナ禍での活動について話し合う

糸杉植樹

JRC活動-6 昔と今

昔

1973年(昭和48年)8月、青少年赤十字再建25周年記念事業として、全国青少年赤十字補導者協議会(現指導者協議会)は「アンリー・デュナン遺跡視察旅行」をした。その記念にソルフェリーノの丘の糸杉から採取した種子が、9月の全国青少年赤十字補導者協議会の会場で各都道府県会長に手渡された。(種子はガラスの小瓶に収納されていた)この種子を東京都支部の担当者が預かり、農林省関東林木育種場に依頼し、苗木にしてもらう。

1977年(昭和52年)4月、東京都支部は、苗木約200本を加盟校23校(希望申込校)に配布した。

1989年(平成元年)12年後のイトスギの育成状況について東京都青少年赤十字賛助会が調査し、現存数50本を確認。現存する学校には、長く育成してもらうため記念の「イトスギ・ネームプレート」を賛助会・支部名で贈呈した。同年、林田荘七氏の自宅で育てられた苗木(二世)27本が都支部に寄贈され、希望校に第2次配布。

1999年(平成11年)3月 武蔵野赤十字病院敷地内に育苗地を設定し、賛助奉仕団イトスギ育苗VS部が栽培を始める。病院の一部建て替えのため2016年(平成28年)返却。自宅育苗へ。



イトスギ・ネームプレート



武蔵野赤十字病院 育苗地

今

それぞれの園・学校で元気に育っています。



私立高校生対象救急法講習会

JRC活動-7 昔と今

昔

この講習会の新規開催1978年(昭和53年)に当たっては、青少年赤十字の普及と、加盟勧誘の副次的な目的が持たれていた。それは、高校加盟数の伸び悩み解消策の一つとして、都内私立高校生に講習会参加を呼びかけた。一義的には参加生徒が自己管理できる健康・安全の技術等を修得しながら、青少年赤十字を理解し、加盟推進にもつなげているように、この講習会開始1時間前には、青少年赤十字の意義と実際活動についての指導を行っている。この講習会は開設当初から受講者が多く、開設3年目からは8月・3月の休み中の2回(区部・市町村別)に分けて、会場は東京都支部で実施している。



昭和62年 私立高校生の救急法受講



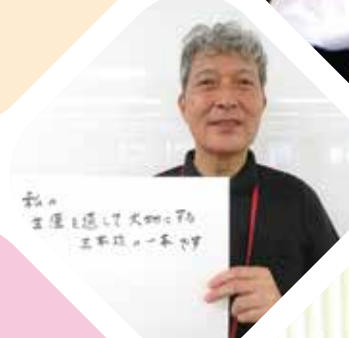
今

現在は、(一般財団法人)東京私立中学高等学校協会の主催・呼びかけにより、8月(救急法および健康生活支援講習)・3月(救急法および幼児安全法)の学校の長期休暇の期間、年度によって3から4日間の日帰り日程で、数名の救急法指導員の協力を得ながら継続実施されている。会場は東京都支部。ただし、2020・2021年(令和2・3年)はコロナ感染拡大防止のために中断を余儀なくされている。



東京都青少年赤十字はイトスギのように
次の100年に向かって
大きく育っていきます





次の100年に向けて



赤十字ができて150年が過ぎました。今年は日本で青少年赤十字が始まって100年目の年を迎えました。誕生から1世紀という節目の年ということで東京都支部では記念事業を実施しています。この年を迎えられたのも今まで参加してくれたメンバーや活動を支えてくださった指導者の皆さんのおかげです。皆さんの誰が欠けても今日を迎えることはできなかったでしょう。改めて心からの感謝と最大の敬意を表します。

ところでセンチュリーの訳語であるこの世紀が初めて使われたのは、1876年(明治9年)のことだそうです。前年の1875年(明治8年)は、「五人委員会」が「赤十字国際委員会」に改称した年であり、翌年の1877年(明治10年)には博愛社が創設されています。話が横道に逸れてしまいました。また、関連性もありませんでした。失礼いたしました。

赤十字は戦争で傷ついた人を敵味方の区別なく救助することを目的に誕生しました。しかしながら未だ武力紛争(戦争の別の名称)はなくなりません。ある歴史家によると記録のある人類の歴史5500年のうちで平和だった時代は268年に過ぎないし、35億人の方が死亡しており、近年では、大半が兵士ではなく民間人だということです。

また、日本赤十字社が初期から行っているものに災害救護があります。青少年赤十字も創立の翌年に発生した関東大震災で活躍された記録があります。地震や台風などの自然災害もなくなることはないでしょう。減災(ぜひ調べてみてください)に取り組むことで被害を減らすことができます。今後もこの二つは赤



十字の重要な活動であり続けるでしょう。

1922年(大正11年)の第二回赤十字社連盟総会の決議で青少年赤十字の目的について以下のように記しています。中学生以下のメンバーには難しい文章でごめんなさい。「少年赤十字(当時の名称)は自分及び他人の健康に対する関心を深めその保持増進に努め、ボランティア精神を体得し、その実行に努め、公民としての義務を理解し外国児童に対する友誼的援助の精神を養うことを目的に組織されなければならない」これは今も変わらずありますよ。実践目標として「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」という形で。

そして現在の青少年赤十字の目的を「青少年が赤十字の精神に基づいて、世界の平和と人類の福祉に貢献できるよう、青少年自身が日常生活の中で望ましい人格と精神を自ら形成すること」とあります。この目的は変わらないでしょう。日本赤十字社の青少年赤十字の皆さんには魔法の言葉があります。そうです、「気づき」「考え」「実行する」です。これを強みにドンドンとチャレンジしましょう。100年以上前にカナダのケベック州で始まった奉仕活動は世界的に広がり、他の事業にも拡大してきました。また、青少年同士の交流にもつながりました。(活動の様子が赤毛のアンシリーズ「アン娘リラ」に書かれています。)

次世代を担う青少年が青少年赤十字を通じて世界的規模で連携して気づいた問題を解決する姿が普通にみられる日はそう遠くないように思いますがどうですか。まず、100年はかからないよね。

資料編（東京都青少年赤十字加盟校数・メンバー数、東京都青少年赤十字教育研究協議会役員（H10-H15））

●東京都青少年赤十字加盟校数

西暦(和暦)	加盟校数					
	合計	幼稚園・保育園	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校
1998(平成10年)	383	43	122	149	69	0
1999(平成11年)	416	45	145	151	75	0
2000(平成12年)	434	43	157	158	76	0
2001(平成13年)	427	44	158	156	69	0
2002(平成14年)	396	44	144	145	63	0
2003(平成15年)	401	43	145	148	65	0
2004(平成16年)	390	42	137	148	63	0
2005(平成17年)	383	42	123	149	69	0
2006(平成18年)	404	41	132	158	72	1
2007(平成19年)	435	44	147	166	77	1
2008(平成20年)	451	45	155	170	80	1
2009(平成21年)	490	65	163	174	87	1
2010(平成22年)	496	71	163	178	83	1
2011(平成23年)	504	76	165	180	82	1
2012(平成24年)	502	76	167	176	82	1
2013(平成25年)	508	76	166	181	84	1
2014(平成26年)	513	77	170	182	83	1
2015(平成27年)	541	79	182	190	89	1
2016(平成28年)	561	78	194	193	91	5
2017(平成29年)	576	76	203	197	94	6
2018(平成30年)	602	77	210	206	101	8
2019(平成31/令和1年)	618	76	216	212	106	8
2020(令和2年)	626	77	222	214	105	8
2021(令和3年)	619	76	223	208	104	8

●東京都青少年赤十字メンバー数

西暦(和暦)	メンバー数					
	合計	幼稚園・保育園	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校
1998(平成10年)	75,402	3,730	37,783	26,119	7,770	0
1999(平成11年)	86,056	3,814	44,045	29,195	9,002	0
2000(平成12年)	84,610	3,747	47,081	26,248	7,534	0
2001(平成13年)	86,825	3,749	45,375	25,134	12,567	0
2002(平成14年)	84,683	3,941	43,111	29,159	8,472	0
2003(平成15年)	83,280	4,054	41,473	29,329	8,424	0
2004(平成16年)	87,044	4,076	43,880	30,298	8,790	0
2005(平成17年)	86,275	3,977	41,459	31,572	9,267	0
2006(平成18年)	93,851	4,049	44,528	33,986	11,248	40
2007(平成19年)	102,769	4,032	50,410	36,037	12,243	47
2008(平成20年)	114,873	4,002	54,383	39,456	16,989	43
2009(平成21年)	124,226	5,387	58,169	43,160	17,469	41
2010(平成22年)	129,838	5,785	58,411	47,894	17,712	36
2011(平成23年)	135,162	6,043	60,486	51,249	17,347	37
2012(平成24年)	134,032	6,272	61,655	48,804	17,264	37
2013(平成25年)	138,718	6,406	61,336	50,763	20,173	40
2014(平成26年)	140,925	6,755	62,617	51,545	19,961	47
2015(平成27年)	150,627	6,703	68,424	53,971	21,487	42
2016(平成28年)	157,923	6,597	73,645	54,324	22,737	620
2017(平成29年)	164,863	6,512	79,132	54,732	23,666	821
2018(平成30年)	173,969	6,803	86,341	55,575	23,880	1,370
2019(平成31/令和1年)	180,444	6,717	90,682	56,272	25,418	1,355
2020(令和2年)	183,357	6,510	94,044	56,365	25,099	1,339
2021(令和3年)	183,429	5,843	96,525	54,636	25,119	1,306

●東京都青少年赤十字教育研究協議会役員

役 職	平成10年度		平成11年度	
	会 長			
副 会 長	東京都教育庁指導部長	蛭田 政弘	東京都教育庁指導部長	斎藤 尚也
	東京都総務局学事部長	長野 宏	東京都総務局学事部長	幸田 昭一
	東京都教育庁指導企画課長	齋藤 尚也	東京都教育庁指導企画課長	近藤 精一
	北区立滝野川小学校校長	大崎 美代子	板橋区立金沢小学校校長	高山 厚子
	江戸川区立小松川第三中学校校長	阿部 英幸	江戸川区立小松川第三中学校校長	阿部 英幸
	東京女子学院中学・高等学校校長	酒井 淳	東京女子学院中学・高等学校校長	酒井 淳
幼稚園研究部長	石鍋幼稚園園長	預幡 邦臣	石鍋幼稚園園長	預幡 邦臣
幼稚園研究副部長	徳持幼稚園園長	小坂 寿子	徳持幼稚園園長	小坂 寿子
小学校研究部長	江戸川区立下鎌田西小学校教頭	小山 定男	江戸川区立新堀第二小学校教頭	小山 定男
小学校研究副部長	世田谷区立明正小学校校長	五十嵐 陽一	世田谷区立明正小学校校長	五十嵐 陽一
中学校研究部長	北区立紅葉中学校校長	米本 雅子	北区立紅葉中学校校長	米本 雅子
中学校研究副部長	荒川区立尾久八幡中学校校長	山田 充男	荒川区立道灌山中学校校長	山田 充男
	大田区立糀谷中学校教頭	高橋 正幸	大田区立糀谷中学校教頭	高橋 正幸
高等学校研究部長	実践学園高等学校副教頭	松尾 高佳	実践学園高等学校副教頭	松尾 高佳
高等学校研究副部長	大妻中学・高等学校教諭	船久保 昭雄	大妻中学・高等学校教諭	船久保 昭雄
	都立深川高等学校教頭	増沢 和夫	都立深川高等学校教頭	増沢 和夫

役 職	平成12年度		平成13年度	
	会 長			
副 会 長	東京都教育庁指導部長	斎藤 尚也	東京都教育庁指導部長	斎藤 尚也
	東京都総務局学事部長	小野田 有	東京都生活文化局私学部長	谷川 健次
	東京都教育庁指導企画課長	近藤 精一	東京都教育庁指導企画課長	坂東 文昭
	板橋区立金沢小学校校長	高山 厚子	板橋区立金沢小学校校長	高山 厚子
	江戸川区立清新第二中学校校長	阿部 英幸	江戸川区立清新第二中学校校長	阿部 英幸
	東京女子学院中学・高等学校校長	酒井 淳	東京女子学院中学・高等学校校長	酒井 淳
幼稚園研究部長	徳持幼稚園園長	小坂 寿子	徳持幼稚園園長	小坂 寿子
幼稚園研究副部長	新宿区立西戸山幼稚園園長	佐藤 暁子	新宿区立西戸山幼稚園園長	佐藤 暁子
小学校研究部長	江戸川区立新堀小学校教頭	小山 定男	江戸川区立新堀小学校教頭	小山 定男
小学校研究副部長	板橋区立高島第二小学校校長	臼木 信子	板橋区立高島第二小学校校長	臼木 信子
中学校研究部長	北区立紅葉中学校校長	米本 雅子	北区立十条中学校校長	米本 雅子
中学校研究副部長	荒川区立道灌山中学校校長	山田 充男	荒川区立第四中学校校長	山田 充男
	大田区立六郷中学校校長	高橋 正幸	大田区立六郷中学校校長	高橋 正幸
高等学校研究部長	実践学園高等学校教頭	松尾 高佳	実践学園高等学校教頭	松尾 高佳
高等学校研究副部長	大妻中学・高等学校教頭	船久保 昭雄	大妻中学・高等学校教頭	船久保 昭雄
	都立深川高等学校教頭	増沢 和夫	都立深川高等学校	増沢 和夫

役 職	平成14年度		平成15年度	
	会 長			
副 会 長	東京都教育庁指導部長	近藤 精一	東京都教育庁指導部長	近藤 精一
	東京都生活文化局私学部長	中澤 正明	東京都生活文化局私学部長	中澤 正明
	東京都教育庁指導企画課長	吉田 崇雄	東京都教育庁指導企画課長	巽 公一
	板橋区立金沢小学校校長	高山 厚子	板橋区立金沢小学校校長	臼木 信子
	江戸川区立清新第二中学校校長	阿部 英幸	江戸川区立清新第二中学校校長	阿部 英幸
	東京女子学院中学・高等学校校長	酒井 淳	東京女子学院中学・高等学校校長	酒井 淳
幼稚園研究部長	新宿区立西戸山幼稚園園長	佐藤 暁子	新宿区立西戸山幼稚園園長	佐藤 暁子
幼稚園研究副部長	徳持幼稚園園長	梅田 雅子	徳持幼稚園園長	小坂 雅子
小学校研究副部長			文京区立根津幼稚園教諭	高木 恭子
	江戸川区立新堀小学校教頭	小山 定男	江戸川区立新堀小学校教頭	小山 定男
	板橋区立高島第二小学校校長	臼木 信子	練馬区立豊玉第二小学校校長	藤平 咲雄
中学校研究部長			港区立白金小学校教諭	小林 英忠
			足立区立寺地小学校教諭	大和 政枝
中学校研究副部長	北区立十条中学校校長	米本 雅子	大田区立六郷中学校校長	高橋 正幸
中学校研究副部長	荒川区立第四中学校校長	山田 充男	荒川区立第四中学校校長	山田 充男
	大田区立六郷中学校校長	高橋 正幸	立川市立第七中学校校長	依光 志法
高等学校研究部長	実践学園高等学校教頭	松尾 高佳	大妻中学・高等学校教頭	船久保 昭雄
高等学校研究副部長	帝京高等学校教諭	白岩 洋一	帝京高等学校教諭	白岩 洋一
	都立深川高等学校	増沢 和夫	蒲田女子高等学校教諭	小林 朱美

資料編（東京都青少年赤十字指導者協議会役員（H16-H24））

役 職	平成16年度		平成17年度	
会 長	東京都教育庁指導部長	近藤 精一	東京都教育庁指導部長	井出 隆安
	東京都生活文化局私学部長	中澤 正明	東京都生活文化局私学部長	新行内 孝男
副 会 長	東京都教育庁指導企画課長	巽 公一	東京都教育庁指導企画課長	岩佐 哲男
	板橋区立金沢小学校校長	臼木 信子	板橋区立金沢小学校校長	臼木 信子
	大田区立六郷中学校校長	高橋 正幸	大田区立大森第十中学校校長	高橋 正幸
	東京女子学院中学・高等学校校長	酒井 津	下北沢成徳高等学校校長	田中 暎二
幼稚園研究部長	新宿区立西戸山幼稚園園長	佐藤 暁子	新宿区立愛日幼稚園園長	佐藤 暁子
幼稚園研究副部長	徳持幼稚園園長	小坂 雅子	徳持幼稚園園長	小坂 雅子
	文京区立根津幼稚園教諭	高木 恭子		
小学校研究部長	江戸川区立新堀小学校教頭	小山 定男	江戸川区立新堀小学校副校長	小山 定男
小学校研究副部長	練馬区立豊玉第二小学校校長	藤平 咲雄	練馬区立豊玉第二小学校校長	藤平 咲雄
	足立区立寺地小学校教諭	大和 政枝	足立区立寺地小学校教諭	大和 政枝
中学校研究部長	立川市立第七中学校校長	依光 志法	八王子市立檜原中学校校長	依光 志法
中学校研究副部長	中央区立日本橋中学校校長	塩入 睦夫	中央区立日本橋中学校校長	塩入 睦夫
	荒川区尾久八幡中学校校長	川嵯 祐弘		
高等学校研究部長	帝京高等学校教諭	白岩 洋一	帝京高等学校教諭	白岩 洋一
高等学校研究副部長	蒲田女子高等学校教諭	小林 朱美	蒲田女子高等学校教諭	小林 朱美
	武蔵野高等学校教諭	浅見 尚次郎	武蔵野高等学校教諭	浅見 尚次郎

役 職	平成18年度		平成19年度	
会 長	東京都教育庁指導部長	井出 隆安	東京都教育庁指導部長	岩佐 哲男
	東京都生活文化局私学部長	新行内 孝男	東京都生活文化スポーツ局私学部長	小濱 哲二
副 会 長	東京都教育庁指導企画課長	岩佐 哲男	東京都教育庁指導部参事	宮川 保之
	板橋区立金沢小学校校長	臼木 信子	板橋区立金沢小学校校長	臼木 信子
	大田区立大森第十中学校校長	高橋 正幸	大田区立大森第十中学校校長	高橋 正幸
	下北沢成徳高等学校校長	田中 暎二	下北沢成徳高等学校校長	田中 暎二
幼稚園研究部長	新宿区立愛日幼稚園園長	佐藤 暁子	新宿区立愛日幼稚園園長	佐藤 暁子
幼稚園研究副部長	徳持幼稚園園長	小坂 雅子	徳持幼稚園園長	小坂 雅子
小学校研究部長	練馬区立旭丘小学校校長	藤平 咲雄	練馬区立旭丘小学校校長	藤平 咲雄
小学校研究副部長	板橋区立志村第一小学校校長	門脇 正	板橋区立志村第一小学校校長	門脇 正
	足立区立寺地小学校教諭	大和 政枝	江戸川区立南葛西第二小学校教諭	大和 政枝
中学校研究部長	三鷹市立第六中学校校長	依光 志法	三鷹市立第六中学校校長	依光 志法
中学校研究副部長	大田区立大森第三中学校副校長	大野 三知男	大田区立大森第三中学校副校長	大野 三知男
高等学校研究部長	帝京高等学校教諭	白岩 洋一	帝京高等学校教諭	白岩 洋一
高等学校研究副部長	蒲田女子高等学校教諭	小林 朱美	蒲田女子高等学校教諭	小林 朱美
	武蔵野高等学校教諭	浅見 尚次郎	武蔵野高等学校教諭	浅見 尚次郎

役 職	平成20年(4月1日～)		平成20年(7月16日～)	
会 長	東京都教育庁指導部長	高野 敬三	東京都教育庁指導部長	高野 敬三
	東京都生活文化スポーツ局私学部長	小濱 哲二	東京都生活文化スポーツ局私学部長	小笠原 広樹
副 会 長	東京都教育庁指導企画課長	金子 一彦	東京都教育庁指導企画課長	金子 一彦
	練馬区立旭丘小学校校長	藤平 咲雄	練馬区立旭丘小学校校長	藤平 咲雄
	大田区立大森第十中学校校長	高橋 正幸	大田区立大森第十中学校校長	高橋 正幸
	下北沢成徳高等学校校長	田中 暎二	下北沢成徳高等学校校長	田中 暎二
幼稚園研究部長	武蔵野赤十字保育園園長	稲田 雅彦	武蔵野赤十字保育園園長	稲田 雅彦
幼稚園研究副部長	徳持幼稚園園長	小坂 雅子	徳持幼稚園園長	小坂 雅子
小学校研究部長	板橋区立常盤台小学校校長	門脇 正	板橋区立常盤台小学校校長	門脇 正
小学校研究副部長	江戸川区立南葛西第二小学校教諭	大和 政枝	江戸川区立南葛西第二小学校教諭	大和 政枝
中学校研究部長	町田市立本町田中学校校長	依光 志法	町田市立本町田中学校校長	依光 志法
中学校研究副部長	荒川区立尾久八幡中学校校長	齋藤 進	荒川区立尾久八幡中学校校長	齋藤 進
	大田区立雪谷中学校副校長	大野 三知男	大田区立雪谷中学校副校長	大野 三知男
高等学校研究部長	帝京高等学校教諭	白岩 洋一	帝京高等学校教諭	白岩 洋一
高等学校研究副部長	蒲田女子高等学校教諭	小林 朱美	蒲田女子高等学校教諭	小林 朱美
	武蔵野高等学校教諭	浅見 尚次郎	武蔵野高等学校教諭	浅見 尚次郎

役 職	平成21年度		平成22年度(4月1日～)	
会 長	東京都教育庁指導部長	高野 敬三	東京都教育庁指導部長	高野 敬三
	東京都生活文化スポーツ局私学部長	小笠原 広樹	東京都生活文化スポーツ局私学部長	小笠原 広樹
副 会 長	東京都教育庁指導企画課長	金子 一彦	東京都教育庁指導企画課長	金子 一彦
	練馬区立旭丘小学校校長	藤平 咲雄	北区立王子小学校校長	瀧淵 壽
	大田区立大森第十中学校校長	高橋 正幸	大田区立大森第十中学校校長	高橋 正幸
	下北沢成徳高等学校校長	田中 暎二	下北沢成徳高等学校校長	田中 暎二
幼稚園研究部長	徳持幼稚園園長	小坂 雅子	徳持幼稚園園長	小坂 雅子
幼稚園研究副部長	武蔵野赤十字保育園保育士長	領家 玲子	文京区立湯島幼稚園園長	菊地 妙子
			武蔵野赤十字保育園保育士長	領家 玲子
小学校研究部長	板橋区立常盤台小学校校長	門脇 正	板橋区立常盤台小学校校長	門脇 正
小学校研究副部長	江戸川区立南葛西第二小学校教諭	大和 政枝	江戸川区立南葛西第二小学校教諭	大和 政枝
中学校研究部長	町田市立本町田中学校校長	依光 志法	荒川区立南千住第二中学校校長	齋藤 進
中学校研究副部長	荒川区立尾久八幡中学校校長	齋藤 進	文京区立文林中学校校長	遠山 政克
	大田区立雪谷中学校副校長	大野 三知男	大田区立雪谷中学校副校長	大野 三知男
高等学校研究部長	帝京高等学校教諭	白岩 洋一	武蔵野高等学校教諭	浅見 尚次郎
高等学校研究副部長	蒲田女子高等学校教諭	小林 朱美	蒲田女子高等学校教諭	小林 朱美
	武蔵野高等学校教諭	浅見 尚次郎	実践学園高等学校教諭	若山 武

役 職	平成22年度(7月16日～)		平成23年度	
会 長	東京都教育庁指導部長	高野 敬三	東京都教育庁指導部長	高野 敬三
	東京都生活文化局私学部長	石井 玲	東京都生活文化局私学部長	石井 玲
副 会 長	東京都教育庁指導企画課長	金子 一彦	東京都教育庁指導企画課長	金子 一彦
	北区立王子小学校校長	瀧淵 壽	北区立堀船小学校校長	川島 瑞穂
	大田区立大森第十中学校校長	高橋 正幸	大田区立大森第十中学校校長	高橋 正幸
	下北沢成徳高等学校校長	田中 暎二	下北沢成徳高等学校校長	田中 暎二
幼稚園研究部長	徳持幼稚園園長	小坂 雅子	徳持幼稚園園長	小坂 雅子
幼稚園研究副部長	文京区立湯島幼稚園園長	菊地 妙子	文京区立湯島幼稚園園長	菊地 妙子
	武蔵野赤十字保育園保育士長	領家 玲子		
小学校研究部長	板橋区立常盤台小学校校長	門脇 正	江戸川区立南葛西第二小学校教諭	大和 政枝
小学校研究副部長	江戸川区立南葛西第二小学校教諭	大和 政枝	杉並区立和田小学校校長	福田 晴一
			板橋区立金沢小学校主幹教諭	麓 晃浩
中学校研究部長	荒川区立南千住第二中学校校長	齋藤 進	荒川区立南千住第二中学校校長	齋藤 進
中学校研究副部長	文京区立文林中学校校長	遠山 政克	大田区立雪谷中学校副校長	大野 三知男
	大田区立雪谷中学校副校長	大野 三知男	足立区立谷中中学校主幹教諭	郷原 眞子
高等学校研究部長	武蔵野高等学校教諭	浅見 尚次郎	武蔵野高等学校教諭	浅見 尚次郎
高等学校研究副部長	蒲田女子高等学校教諭	小林 朱美	蒲田女子高等学校教諭	小林 朱美
	実践学園高等学校教諭	若山 武	実践学園高等学校教諭	若山 武

役 職	平成24年度(4月1日～)		平成24年度(7月17日～)	
会 長	東京都教育庁指導部長	坂本 和良	東京都教育庁指導部長	坂本 和良
	東京都生活文化局私学部長	石井 玲	東京都生活文化局私学部長	榎本 雅人
副 会 長	東京都教育庁指導企画課長	出張 吉訓	東京都教育庁指導企画課長	出張 吉訓
	北区立堀船小学校校長	川島 瑞穂	北区立堀船小学校校長	川島 瑞穂
	大田区立東調布中学校校長	高橋 正幸	大田区立東調布中学校校長	高橋 正幸
	下北沢成徳高等学校校長	田中 暎二	下北沢成徳高等学校校長	田中 暎二
幼稚園研究部長	徳持幼稚園園長	小坂 雅子	徳持幼稚園園長	小坂 雅子
幼稚園研究副部長	文京区立第一幼稚園園長	菊地 妙子	文京区立第一幼稚園園長	菊地 妙子
小学校研究部長	江戸川区立南葛西第二小学校教諭	大和 政枝	江戸川区立南葛西第二小学校教諭	大和 政枝
小学校研究副部長	杉並区立和田小学校校長	福田 晴一	杉並区立和田小学校校長	福田 晴一
	板橋区立金沢小学校主幹教諭	麓 晃浩	板橋区立金沢小学校主幹教諭	麓 晃浩
中学校研究部長	荒川区立南千住第二中学校校長	齋藤 進	荒川区立南千住第二中学校校長	齋藤 進
中学校研究副部長	足立区立谷中中学校主幹教諭	郷原 眞子	足立区立谷中中学校主幹教諭	郷原 眞子
	荒川区立南千住第二中学校主幹教諭	伊藤 錦之助	荒川区立南千住第二中学校主幹教諭	伊藤 錦之助
高等学校研究部長	武蔵野高等学校教諭	浅見 尚次郎	武蔵野高等学校教諭	浅見 尚次郎
高等学校研究副部長	蒲田女子高等学校教諭	小林 朱美	蒲田女子高等学校教諭	小林 朱美
	実践学園高等学校教諭	若山 武	実践学園高等学校教諭	若山 武

資料編（東京都青少年赤十字指導者協議会役員（H25-R3））

役 職	平成25年度(4月1日～)		平成25年度(9月20日～)	
会 長	東京都教育庁指導部長	金子 一彦	東京都教育庁指導部長	金子 一彦
副 会 長	東京都生活文化局私学部長	榎本 雅人	東京都生活文化局私学部長	武市 玲子
	東京都教育庁指導企画課長	増渕 達夫	東京都教育庁指導企画課長	増渕 達夫
	杉並区立天沼小学校校長	福田 晴一	杉並区立天沼小学校校長	福田 晴一
	荒川区立南千住第二中学校校長	齋藤 進	荒川区立南千住第二中学校校長	齋藤 進
	下北沢成徳高等学校校長	田中 暎二	下北沢成徳高等学校校長	田中 暎二
幼稚園研究部長	徳持幼稚園園長	小坂 雅子	徳持幼稚園園長	小坂 雅子
幼稚園研究副部長	文京区立第一幼稚園園長	菊地 妙子	文京区立第一幼稚園園長	菊地 妙子
小学校研究部長	豊島区立富士見台小学校教諭	大和 政枝	豊島区立富士見台小学校教諭	大和 政枝
小学校研究副部長	荒川区立大門小学校副校長	伊藤 錦之助	荒川区立大門小学校副校長	伊藤 錦之助
	板橋区立板橋第七小学校主幹教諭	麓 晃浩	板橋区立板橋第七小学校主幹教諭	麓 晃浩
中学校研究部長	大田区立石川台中学校副校長	和田 桂一	大田区立石川台中学校副校長	和田 桂一
中学校研究副部長	足立区立谷中学校主幹教諭	郷原 眞子	足立区立谷中学校主幹教諭	郷原 眞子
	新宿区立西早稲田中学校主幹教諭	池田 博	新宿区立西早稲田中学校主幹教諭	池田 博
高等学校研究部長	実践学園高等学校教諭	若山 武	実践学園高等学校教諭	若山 武
高等学校研究副部長	蒲田女子高等学校教諭	小林 朱美	蒲田女子高等学校教諭	小林 朱美
	大妻高等学校教諭	佐藤 浩美	大妻高等学校教諭	佐藤 浩美

役 職	平成26年度		平成27年度	
会 長	東京都教育庁指導部長	金子 一彦	東京都教育庁指導部長	伊東 哲
副 会 長	東京都生活文化局私学部長	武市 玲子	東京都生活文化局私学部長	加藤 仁
	東京都教育庁指導企画課長	増渕 達夫	東京都教育庁指導企画課長	増渕 達夫
	杉並区立天沼小学校校長	福田 晴一	杉並区立天沼小学校校長	福田 晴一
	荒川区立南千住第二中学校校長	齋藤 進	荒川区立第一中学校校長	稲葉 裕之
	下北沢成徳高等学校校長	田中 暎二	下北沢成徳高等学校校長	田中 暎二
幼稚園研究部長	徳持幼稚園園長	小坂 雅子	徳持幼稚園園長	小坂 雅子
幼稚園研究副部長			とうかいどう保育園園長	川山 登喜子
小学校研究部長	豊島区立富士見台小学校教諭	大和 政枝	豊島区立富士見台小学校教諭	大和 政枝
小学校研究副部長	荒川区立大門小学校副校長	伊藤 錦之助	荒川区立大門小学校副校長	伊藤 錦之助
	板橋区立板橋第七小学校主幹教諭	麓 晃浩	板橋区立板橋第七小学校主幹教諭	麓 晃浩
中学校研究部長	大田区立石川台中学校副校長	和田 桂一	大田区立石川台中学校副校長	和田 桂一
中学校研究副部長	足立区立谷中学校主幹教諭	郷原 眞子	新宿区立西早稲田中学校副校長	池田 博
	新宿区立西早稲田中学校主幹教諭	池田 博	江東区立深川第四中学校主幹教諭	慶野 富士夫
高等学校研究部長	実践学園高等学校教諭	若山 武	実践学園高等学校教諭	若山 武
高等学校研究副部長	蒲田女子高等学校教諭	小林 朱美	蒲田女子高等学校教諭	小林 朱美
	大妻高等学校教諭	佐藤 浩美	大妻高等学校教諭	佐藤 浩美

役 職	平成28年度		平成29年度	
会 長	東京都教育庁指導部長	出張 吉訓	東京都教育庁指導部長	増渕 達夫
副 会 長	東京都生活文化局私学部長	加藤 仁	東京都生活文化局私学部長	金子 光博
	東京都教育庁指導企画課長	冠木 健	東京都教育庁指導企画課長	建部 豊
	杉並区立天沼小学校校長	福田 晴一	杉並区立杉並第二小学校校長	佐野 篤
	荒川区立第一中学校校長	稲葉 裕之	荒川区立諏訪台中学校校長	稲葉 裕之
	下北沢成徳高等学校校長	田中 暎二	下北沢成徳高等学校校長	田中 暎二
幼稚園研究部長	徳持幼稚園園長	小坂 雅子	徳持幼稚園園長	小坂 雅子
幼稚園研究副部長	とごしの杜保育園園長	川山 登喜子	とうかいどう保育園園長	川山 登喜子
小学校研究部長	豊島区立富士見台小学校教諭	大和 政枝	小平市立小平第十二小学校校長	木田 明男
小学校研究副部長	板橋区立板橋第七小学校主幹教諭	麓 晃浩	杉並区立西田小学校副校長	新井 雅晶
	杉並区立西田小学校副校長	新井 雅晶	板橋区立板橋第七小学校主幹教諭	麓 晃浩
中学校研究部長	大田区立石川台中学校副校長	和田 桂一	荒川区立第一中学校副校長	伊藤 錦之助
中学校研究副部長	荒川区立第一中学校副校長	伊藤 錦之助	大田区立大森第三中学校副校長	阿部 仁明
	江東区立深川第四中学校主幹教諭	慶野 富士夫	江東区立深川第四中学校主幹教諭	慶野 富士夫
高等学校研究部長	実践学園高等学校教諭	若山 武	実践学園高等学校教諭	若山 武
高等学校研究副部長	蒲田女子高等学校教諭	小林 朱美	蒲田女子高等学校教諭	小林 朱美
	大妻中学・高等学校教諭	佐藤 浩美	大妻中学高等学校教諭	佐藤 浩美

役 職	平成30年度		令和元年度	
会 長	東京都教育庁指導部長	宇田 剛	東京都教育庁指導部長	増田 正弘
副 会 長	東京都生活文化局私学部長	金子 光博	東京都生活文化局私学部長	濱田 良廣
	東京都教育庁指導部指導企画課長	石田 周	東京都教育庁指導企画課長	小寺 康裕
	杉並区立杉並第二小学校校長	佐野 篤	杉並区立杉並第二小学校校長	佐野 篤
	荒川区立諏訪台中学校校長	稲葉 裕之	荒川区立諏訪台中学校校長	稲葉 裕之
	下北沢成徳高等学校校長	田中 暎二	下北沢成徳高等学校校長	田中 暎二
			東京都立葛飾商業高等学校校長	昼間 一雄
幼稚園研究部長	徳持幼稚園園長	小坂 雅子	徳持幼稚園園長	小坂 雅子
幼稚園研究副部長	とうかいどう保育園園長	川山 登喜子	とうかいどう保育園園長	川山 登喜子
小学校研究部長	小平市立小平第十二小学校校長	木田 明男	小平市立小平第三小学校校長	木田 明男
小学校研究副部長	板橋区立板橋第七小学校主幹教諭	麓 晃浩	杉並区立西田小学校副校長	新井 雅晶
	杉並区立西田小学校副校長	新井 雅晶	板橋区立板橋第七小学校主幹教諭	麓 晃浩
中学校研究部長	荒川区立第一中学校副校長	伊藤 錦之助	荒川区立南千住第二中学校副校長	伊藤 錦之助
中学校研究副部長	江東区立深川第四中学校主幹教諭	慶野 富士夫	江東区立第二砂町中学校副校長	慶野 富士夫
高等学校研究部長	実践学園高等学校教諭	若山 武	実践学園高等学校教諭	若山 武
高等学校研究副部長	蒲田女子高等学校教諭	小林 朱美	大妻中学高等学校教諭	佐藤 浩美
	大妻中学・高等学校教諭	佐藤 浩美	下北沢成徳高等学校教諭	渋谷 浩

役 職	令和2年度		令和3年度	
会 長	東京都教育庁指導部長	増田 正弘	東京都教育庁指導部長	藤井 大輔
副 会 長	東京都生活文化局私学部長	濱田 良廣	東京都生活文化局私学部長	戸谷 泰之
	東京都教育庁指導企画課長	小寺 康裕	東京都教育庁指導企画課長	栗原 健
	杉並区立杉並第二小学校校長	佐野 篤	杉並区立杉並第二小学校校長	佐野 篤
	荒川区立第四中学校校長	稲葉 裕之	荒川区立第四中学校校長	稲葉 裕之
	東京都立葛飾商業高等学校校長	昼間 一雄	武蔵野中学高等学校副校長	浅見 尚次郎
幼稚園研究部長	徳持幼稚園園長	小坂 雅子	徳持幼稚園園長	小坂 雅子
幼稚園研究副部長	とうかいどう保育園園長	川山 登喜子	とうかいどう保育園園長	川山 登喜子
小学校研究部長	小平市立小平第三小学校校長	木田 明男	小平市立小平第三小学校校長	木田 明男
小学校研究副部長	足立区立北鹿浜小学校副校長	新井 雅晶	足立区立北鹿浜小学校副校長	新井 雅晶
	板橋区立大谷口小学校主幹教諭	麓 晃浩	板橋区立大谷口小学校主幹教諭	麓 晃浩
中学校研究部長	荒川区立南千住第二中学校副校長	伊藤 錦之助	荒川区立南千住第二中学校副校長	伊藤 錦之助
中学校研究副部長	江東区立第二砂町中学校副校長	慶野 富士夫	江東区立第二砂町中学校副校長	慶野 富士夫
	品川区立日野学園主任教諭	小林 辰徳	品川区立日野学園主任教諭	小林 辰徳
高等学校研究部長	実践学園高等学校教諭	若山 武	実践学園高等学校教諭	若山 武
高等学校研究副部長	下北沢成徳高等学校教諭	渋谷 浩	下北沢成徳高等学校教諭	渋谷 浩
	東京都立葛飾商業高等学校教諭	小林 朱美	東京都立葛飾商業高等学校教諭	小林 朱美

おわりに

東京都青少年赤十字100周年にあたり、青少年赤十字が歩んできた歴史をふりかえり、これからの青少年赤十字のあゆむところを示せるような記念誌の作成を目指してきました。

本来ですと、編集委員会を開き、歴史を学び合うことも節目の年の研修として、大きな意義があったのですが、新型コロナウイルス感染症の影響で、支部に集まり活動することが出来ませんでした。

支部職員で手分けをし、今までの20周年・30周年・40周年の記念誌「あゆみ」と都支部90周年誌、100周年誌「人道ひとすじ」から、その時代ごとに工夫しながら活動してきたことの変遷を学ばせていただきました。青少年赤十字指導者協議会と青少年赤十字賛助奉仕団の活動に支えられて、青少年の心豊かな活動が進められてきています。これからの地球規模の変化の大きな時代に、青少年がどのような状況の中でも、「気づき 考え 実行する」態度目標を心に刻み、自ら成長していくことを願っています。

コロナ禍で多くのことがオンラインでの活動になりましたが、ご協力いただいた全ての方々に、感謝申し上げます。

【参考資料】

東京都青少年赤十字再建20周年記念誌「あゆみ」（昭和43年7月発行）

東京都青少年赤十字30周年記念誌「あゆみ」（昭和53年3月31日発行）

東京都青少年赤十字再建40周年記念誌「あゆみ」（昭和63年3月31日発行）

日本赤十字社東京都支部100周年記念誌「人道ひとすじ」（平成元年7月31日発行）

日本赤十字社東京都支部「九十年のあゆみ」（昭和55年3月31日発行）

滋賀県青少年赤十字のあゆみ 1922～2015 （2017年3月31日発行）

赤十字奉仕団創設50周年・青少年赤十字創設75周年記念誌 （平成11年3月発行）

全国青少年赤十字賛助奉仕団創立40周年記念誌「いとすぎ」（平成16年10月発行）

全国青少年赤十字賛助奉仕団創立50周年記念誌「いとすぎ」（平成26年10月発行）

東京都青少年赤十字賛助奉仕団広報「とうきょう」（平成8年12月創刊号～令和2年12月発行22号）

東京都支部事業年報 （昭和22年～平成10年度）

東京都支部事業報告 （平成11年度～30年度）

その他 各種東京都支部保存記録から

東京都青少年赤十字100周年記念誌「あゆみ」 2022年5月発行

発行・編集	東京都青少年赤十字指導者協議会、日本赤十字社東京都支部
協力	東京都青少年赤十字賛助奉仕団 小川忠彦 一橋大学 竹村仁美 下北沢成徳高等学校JRC部
特別協力	東京都青少年赤十字賛助奉仕団